表1　世帯数及び人口の推移

区　分	世帯数	人　口			一世帯当り人口	人口指数 大正9年＝100
		総数	男	女		
大正9年	1,652	9,441	4,662	4,749	5.7	100.0
14年	1,738	9,447	4,531	4,916	5.4	100.1
昭和5年	1,646	9,287	4,563	4,724	5.6	98.4
10年	1,636	8,751	4,294	4,457	5.3	92.7
15年	1,633	8,832	4,290	4,542	5.4	93.5
20年	1,785	10,242	5,011	5,231	5.7	108.5
25年	1,952	10,728	5,154	5,574	5.5	113.6
30年	1,904	10,851	5,277	5,574	5.7	114.9
35年	1,964	10,417	4,966	5,451	5.3	110.3
40年	2,069	10,329	4,922	5,407	5.0	109.4
45年	2,358	10,803	5,085	5,718	4.6	114.4
50年	2,654	11,418	5,425	5,993	4.3	120.9
55年	3,024	12,239	5,855	6,384	4.0	129.6

資料：総理府統計局「国勢調査報告」

農業の停滞によって、大都市に人口が移動したことによる。本町の場合、佐賀県全体の減少率に比べ、ほとんど横ばい状態を保ち、昭和四十二年頃より再び上昇の傾向をみるにいたった。同五十年以後の急増は、佐賀市、大川市などのベッドタウンとしての住宅増や、工場誘致にともなう若年層の定着などによるものである。

昭和五十四年、諸富町政二十五周年を記念にして、近代的な町役場を建設、これにともなって、将来への総合開発計画を策定、自然と調和した魅力ある町づくりを目指している。

二　地理的環境

(一)　位置・面積

諸富町は佐賀郡南東部に位置し、東は九州一の大河、筑後川を隔てて福岡県大川市に、西は佐賀市、南は川副町、北は佐賀江湖をはさんで佐賀市蓮池町に隣接している。東西約四・四キロメートル、南北四・二キロメートルにおよぶ純農村地帯である。

本町の中心部をなす町役場の位置は、北緯三三度一三分一三秒、東経一三〇度二一分一六秒にあって、国道二〇八号線を主幹道として福岡県大川市と佐賀市を結び、佐賀駅までの距離は約七キロメートルである。またこの国道と平行して、国鉄の佐賀線が佐賀駅と鹿児島本線の瀬高駅を結んでいる。町の北部に県道神埼―諸富線、南部に国道四四四号線が走り、ここに生活道路の町道が交錯している。筑後川に面する諸富港は現在も水運の河口港として物資の輸送につかわれている。

本町の総面積は一二・二〇平方キロメートルで、佐賀県下の町村では、呼子町・三田川町・大町町に次いで四番目に小さな町村で、佐賀県総面積の約二〇〇分の一に当たる。総面積の地目内訳は表2のとおりで、田畑が全体の五五％を占め、文字どおり穀倉地帯であることがわかる。山林原野は皆無である。

本町を縦横に走っている河川の内訳は河川一四六㌶、水路七一㌶となっている。また宅地の内訳は住宅地一二五㌶、工場用地四三㌶、事務所・店舗等二五㌶となっている。

近年、農業生産基盤整備事業として、圃場整備などが進められ、水路や道路面積が拡張され、また、住宅や工場の進出によって、農地面積が年々少なくなっている。

なお、本町内部は大堂・山領・為重・寺井津・諸富津・徳富の六つの大字の下に表3のような小字がある。この小字は明治十六年調の「佐賀県各町村字小名取調書」と比較すると、更に小さな字名がこのほかにあったことがわかる。（近代編参照）

図1　佐賀県における諸富町の位置

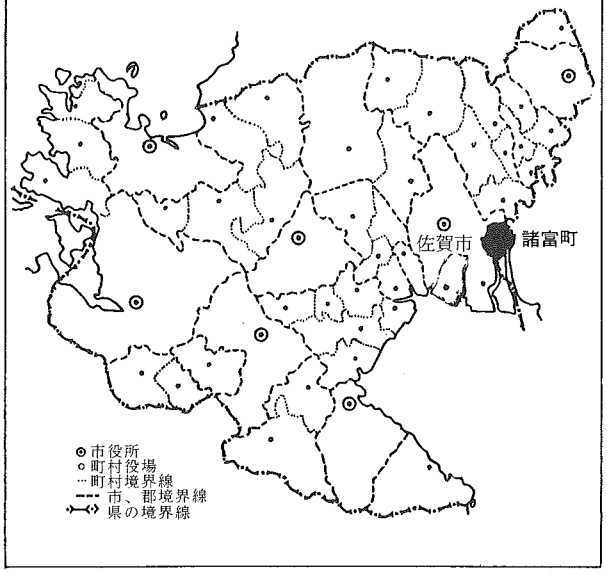


表2　諸富町地目別面積

（昭和55年度）

区分	農地	河川	宅地	道路	その他	合計
面積	ha 667	ha 217	ha 193	ha 55	ha 88	ha 1,220
百分比	% 54.67	% 17.78	% 15.81	% 4.50	% 7.21	% 100

資料：町税務課調

表3　諸富町内小字

大堂			山領			94	為重新搦	石塚分	145	弐本松	上下分
						95	為重分松中堀	〃	146	壱本松	〃
番号	字名		47	壱本松	小杭分	96	外搦	〃	147	上下分村中	〃
1	野町搦	大堂分	48	田代屋敷	〃	97	石塚分松中土居	〃	148	四本松	〃
2	弁財	〃	49	小杭分村中	〃	98	中搦	〃	149	上下分土井外	〃
3	納右衛門搦	〃	50	参本松	〃	99	石塚分村中	〃	150	天神丸搦	〃
4	大堂新津	〃	51	壱本谷	〃	100	五本松	〃	寺井津		
5	光増津	〃	52	天神	〃	101	壱本杉	〃			
6	村内角その1	〃	53	弐本松	〃	102	参本松	〃	151	搦	寺井津分
7	村内角その2	〃	54	四本松	〃	103	四本松	〃	152	浮盃	〃
8	五本松	〃	55	立の尾屋敷	〃	104	壱本谷	〃	153	東寺井	〃
9	四本松	〃	56	為重入地五本松	〃	105	弐本黒木	為重分	154	西寺井	〃
10	壱本松	〃	57	壱本黒木	山領分	106	壱本黒木	〃	諸富津		
11	弐本松	〃	58	五本谷	〃	107	松丸屋敷	〃			
12	参本松	〃	59	天神	〃	108	五本杉	〃	155	四本松	諸富津分
13	寺領	太田分	60	一の橋	〃	109	四本杉	〃	156	弐本松	〃
14	五本松	〃	61	壱本松	〃	110	参本杉	〃	157	壱本松	〃
15	壱本谷	〃	62	山領分村中	〃	111	為重分村中	〃	158	諸富津	〃
16	本村	〃	63	弐本松	〃	112	壱本杉	〃	159	壱本松(味の素)	〃
17	弐本杉	〃	64	参本松	〃	113	弐本杉	〃	徳富		
18	参本杉	〃	65	四本松	〃	114	壱本椎	〃			
19	土師分	〃	66	弐本谷	〃	115	弐本椎	〃	160	高津搦	大中島分
20	参本谷	〃	67	参本谷	〃	116	五本椎	〃	161	西与助搦	〃
21	四本谷	〃	68	四本谷	〃	117	皮田	〃	162	新搦	〃
22	壱本杉	〃	69	弐本黒木	〃	118	四本谷	〃	163	壱本柳	〃
23	五本谷	〃	70	壱本黒木	福田分	119	弐本谷	〃	164	屋敷副	〃
24	五本杉	〃	71	野町村中	〃	120	参本谷	〃	165	善之充搦	〃
25	四本杉	〃	72	弐本黒木	〃	121	壱本谷	〃	166	外新地その1	徳富分
26	壱本黒木	〃	73	五本谷	〃	122	龍玉屋敷	〃	167	原場	〃
27	弐本松	〃	74	参本黒木	〃	123	参本椎	〃	168	元新地	〃
28	参本松	〃	75	四本黒木	〃	124	四本椎	〃	169	外新地その2	〃
29	四本松	〃	76	五本杉	〃	125	元寺領	〃	170	北篭	〃
30	六の坪	加与丁分	77	五本黒木	〃	126	外搦	〃	171	壱本杉	〃
31	弐本谷	〃	78	水町村中	〃	127	西寺井茂左衛門搦	〃	172	八郎右衛門搦	〃
32	四本谷	〃	79	壱本谷	〃	128	為重分土井外	〃	173	橋津	〃
33	四本松	〃	80	弐本谷	〃	129	源七搦	〃	174	壱本松	〃
34	加与丁	〃	81	福田分村中	〃	130	壱本松その1	三重分	175	弐本松	〃
35	参本谷	〃	82	四本松	〃	131	壱本松その2	〃	176	本村	〃
36	弐本松	〃	83	五本松	〃	132	五本杉	〃	177	参本松	〃
37	陣の内	〃	為重			133	壱本杉	〃	178	五本黒木	〃
38	参本松	〃				134	三重分村中その1	〃	179	四本松	〃
39	五本松	〃	84	石塚分土井外その1	石塚分	135	三重分村中その2	〃	180	五本松	〃
40	壱本谷	〃	85	石塚分土井外その2	〃	136	弐本杉	〃	181	上大津	〃
41	壱本松その1	〃	86	石塚分土井外その3	〃	137	参本杉	〃	182	壱本黒木	〃
42	壱本松その2	〃	87	石塚搦	〃	138	弐本松	〃	183	下大津	〃
43	小曲その1	〃	88	諸富御新地	〃	139	参本松	〃	184	参本黒木	〃
44	中島	〃	89	浮盃新津町屋敷	〃	140	四本杉	〃	185	四本黒木	〃
45	加与丁	〃	90	諸富新搦	〃	141	弐本杉	上下分	186	弐本黒木	〃
46	小曲その2	〃	91	石塚新搦その1	〃	142	壱本杉	〃	187	天神	〃
			92	石塚新搦その2	〃	143	五本松	〃			
			93	元町新搦	〃	144	参本松	〃			

(二) 有明海の誕生と変遷

諸富町は筑後川のゆたかな流れと、有明海の激しい干満による沖積作用を母胎とした自然陸化と、干拓によって誕生した土地柄である。深井戸を掘ると蛎殻などがいたるところから出土し、かつてこの地が有明海の海底であったことを物語っている。本町の歴史は有明海を無視して語ることはできない。現在でも諸富港の水運や有明海の海苔養殖など、本町にとっては、かけがえのない海である。まずは有明海の誕生、その変遷による平野の進展などから、郷土のなりたちを眺めてゆきたい。

1 有明海の名称由来

有明海の名称がいつごろから公称されたかはっきりしない。明治十七年刊の『佐賀県地理小志』には有明沖とみえるが、正式に有明海という名称が用いられたのは明治三十二年の陸地測量部の五万分の一の地図で、佐賀県の地先に小さく「有明海」としるされ、その沖に大きく「筑紫海」としるされているのがはじまりとみられる。明治三十九年刊の『佐賀県案内』には、「筑紫の海」（一名有明海）と表現されている。

有明海と名称が単独でつかわれるようになったのは、明治四十五年の陸地測量部発行の二〇万分の一地図以後で、それ以前の地名辞書や地図類には「筑紫海」「筑紫潟」の名でしるされている。したがって「有明海」と公称されるようになったのは、明治末年以後のきわめて新しいことといえる。土地の人たちは、有明海のことを単に

前海（まえうみ）と呼んでおり、「前海物」といえば、有明海でとれる魚や貝のことをさし、前海物専門の魚店もある。

現在、有明海の名前は公認されているが、地理的にいえば、陸地状に入り込んだ湖や海を「湾」と名づけることが常識になっている。有明海の入口に島原湾があり、その奥に有明海があるのは少しおかしなことである。正しくいえば有明湾といった方がよいかもしれないが、鹿児島県の志布志湾の別称を「有明湾」と称しているので、重複を避けたのかもわからない。

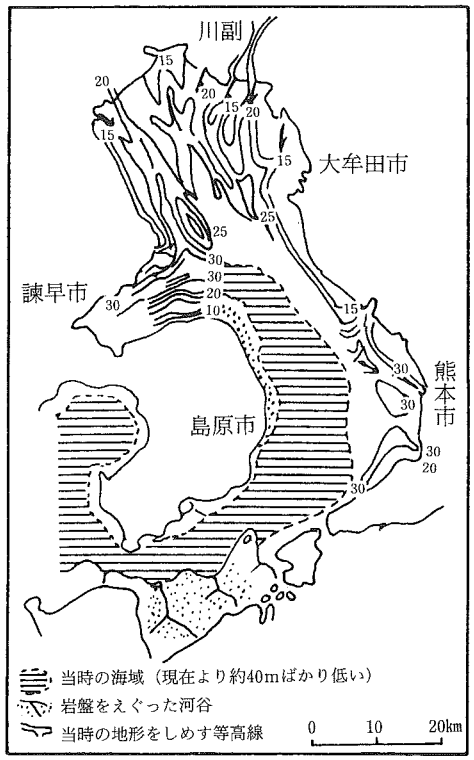
有明海の干潟

2 有明海の誕生

有明海の誕生がいつごろであるか、九州大学や資源科学研究所、九州農政局の学者らが中心となって、有明海研究グループがつくられ、各分野から本格的な調査研究が行われた。その主なものは郷原保真『九州地方のテフロクロノジー』（第四紀研究第三巻一―二号）。有明海研究グループ『有明・不知火海の第四系』（地学団体研究会専報第一号）、首藤次男『九州の最新統諸層の対比』（地質学雑誌六十八号）、亀井節夫『有明海の旧象化石』などの論文を参考にさせていただいて、有明海の変遷を略記する。

現在の有明海が誕生するまで、何百回という地殻の変動があり、またその間数十万年という長期の氷期（現海面より数十メートル水位低

図2　古有明海図



たときの川の流れ）による浸食によって、できたものと考えられている。

有明海の原形ができたのは、約三〇万年前のリス・ウルム間氷期の海進にともなう湾入（古有明海）とみられているが、いまの有明海の形状とは全く異なり、現在の諫早付近から東シナ海へ広がる東西に長軸をもつ内湾であったことがわかっている。

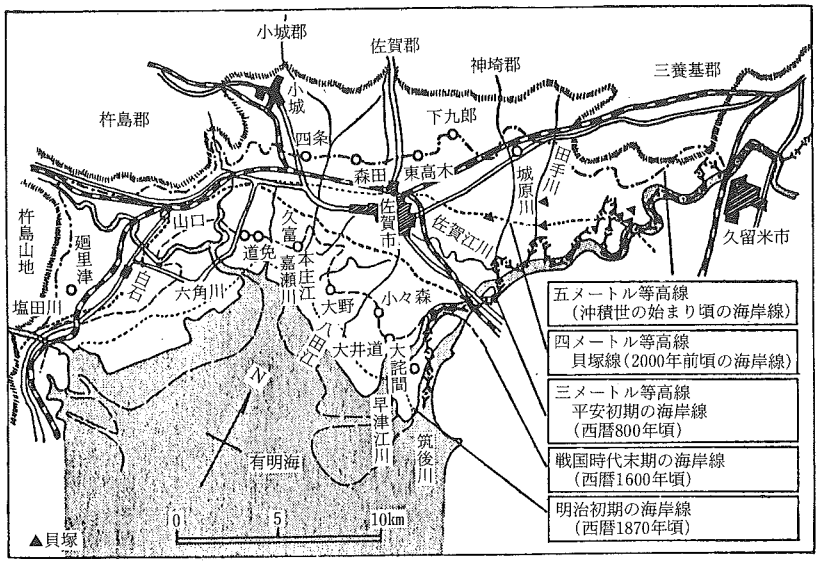
古有明海があったところは、現在の有明海の島原半島より水深三〇㍍ないし四〇㍍深いところで、この海底は層の厚さ、最大三〇㍍、平均二〇㍍におよぶ有明粘土層と呼ばれる軟弱な粘着力の強い土が堆積している。これが潟土とかヘどろといわれるもので、その下には島原海湾層と呼ばれる平均二五㍍の砂礫層が、広く平坦面をなして形成している。なお、島原海湾層の下には、阿蘇山の爆発物である軽石凝灰岩層がある。この阿蘇山の爆発は、いまから三万三〇〇〇年前のことで、当時の有明海は現海面より五〇㍍以上低下していた。島原海湾層ができたのは、一万一〇〇〇年ほど前で、当時の有明海面は、現海面より四〇㍍以上低下していた。したがっていまの有明海や不知火海のほとんどが陸地で、当時の有明海はいまの江湖筋のように、細い川状のような形で湾入していた。

有明海の海底からは、鮮新世から洪積世の終わりにかけ、いろいろな動植物の化石が発見されている。動物の化石は、ステゴン象とナウマン象で、島原半島近くの海底で多く発掘されている。植物は現在多良岳や脊振山頂付近にみられるブナやナギなどの化石が発見されたことは、かつて有明海の大部分が陸地であったことを物語っている。

現在、有明海に注ぐ最大の大河筑後川の河口から、有明海へむかって、海底水道や埋没谷がみられないのは、筑後川が有明海へ注ぐようになってまだ新しいことを示している。ところで、そのころ佐賀県には、人類はいただろうか。小城郡三日月町東分や多久市三年山付近には、いまから三万年以前に人類がいたことがわかっており、いまの有明海付近の平野部に、狩りに出かけたことも想像される。

一万年ほど前の有明海は、ほとんどが陸地で、いまの海面より約四〇㍍ほど低下していたが、この一万年前後期を境に、気温が上昇しはじめ、大陸氷河や山岳氷河が溶けはじめたので、いまから六〇〇〇年ほど前には、有明海が佐賀平野部に深く浸入、いまの佐賀郡大和町尼寺付近の海抜六㍍線前後まで海となった。しかし、この温暖な時期も、約五〇年ほどで、縄文時代の中期ころには、また寒さが増し、北洋では氷河ができはじめたので、

図3　佐賀平野進展図



有明海の水面はしだいに低下を続け、約四〇〇〇年ほど前には、いまの佐賀市高木瀬町付近の海抜五メートル線付近が海岸線となった。したがっていまの有明海の原形は、約四〇〇〇年ほど前の縄文時代の中期にできたと考えられる。この海抜五メートル等高線の下底に牡蛎殻層を含む溝渠があり、牡蛎層の北限となっているばかりでなく、古沖積層と新沖積層の境界線にも当たる。

現在、有明海の大潮のときは潮位が五メートルにも達する。これは約四〇〇〇年前の有明海の海岸線であった海抜五メートルの等高線まで、潮がさかのぼることになり、海岸線と潮位が一致する。

3　海抜五メートル線のもつ意味

佐賀平野の進展図を参照すれば、海岸線の変遷が一目瞭然のようにみえるが、この線が即海岸線というわけではない。海抜五メートル線は縄文時代中期の海岸線と推定されるが、実際には筑後川や嘉瀬川などの乱流により、大小のデルタが散在し、複雑な海岸線を形成したものと考えられる。

海抜五メートル線は古沖積層と新沖積層の、水田と畑作の漸移線としての意味をもち、古沖積層の地盤が高燥強硬であるのに反して、新沖積層は地盤も低湿軟弱であるという性質をもっている。

縄文時代晩期から弥生時代へ過渡する二四〇〇年ほど前、再び海退現象が続き、いまから一三〇〇年ほど前の古墳時代に再び海進し、現在の水位に復し、今日に至っていると考えられている。

縄文時代は自然の動物に依存した採集経済の時代であったので、一定の定住生活を営まず、良質の水と食糧に恵まれた山間山麓部に生活したことが、今日遺跡として発見されている。海抜五メートル線付近から南にかけては、有明海の広大な干潟荒野が続き、葦原には多くの野獣や渡り鳥などが生息していたことが考えられる。

4　海抜四メートル線のもつ意味

佐賀平野の海抜四メートル線を結ぶと、牛津―嘉瀬―佐賀を結ぶ国道二〇七号線（旧三四号線）と、佐賀―詫田―江見―久留米を結ぶ国道二六四号線付近となる。この線は弥生時代の海岸線と考えられ、国道二六四号線沿いには多くの貝塚が分布している。この貝塚のうち最上部に当たる三根町の本分貝塚は、地表下三〇センのところに四五センの層をなして貝殻が発見されている。この貝塚を基準として、川副町南端の平和搦との距離を計ると、約二〇キロメートルある。この二〇キロメートルを二〇〇〇年かかって埋めたことになる。単純に割算すると、一年間に一〇メートルずつ干潟が進出して陸地になったことになるが、この数値は、鎌倉末期以後実施された人工の開拓や干拓の成果も計算した数値で、干潟成長の最も旺盛な筑後川下流で計算した数値である。

本町の場合この計算でいくと、三根町の本分貝塚から徳富付近で一二キロメートルほど前になり、八〇〇年ほど前の海岸線になるが、ここは筑後川のほか、脊振山より流れる城原川、嘉瀬川の流入、土砂の堆積も考えられ、これより更に一〇〇年ほど前の奈良時代の初期には、すでに干潟が形成されていたのではないかとみられる。

(三) 干拓平野の展開

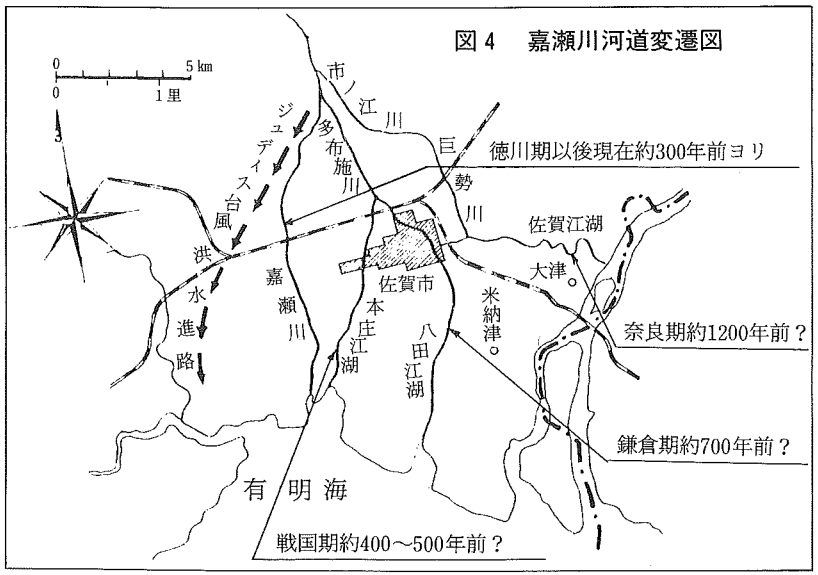
1 諸富平地の変遷

諸富町は筑後川と城原川などから運搬される土砂の堆積によって、年々自然陸化が進んだ。古墳時代ころになると、佐賀市から佐賀江湖を連ねる東西線が海抜三メートル線で、このあたりが当時の海岸線と推定されている。

『肥前風土記』によると、神埼郡の西部を南流した三根川は直接海に注いでいた。三根川は現在の城原川、馬場川、田手川のいずれかに当たると思われるが、いまは筑後川に入っている。奈良時代までは直接海に入っていたというから、筑後川の河口部がおそらくラッパ状に開いて、田手川、城原川の合流点付近まで、有明海が湾入していたものと考えられる。風土記にみえる佐嘉川は、現在の嘉瀬川で、佐賀平野最大の河川である。その河道はしばしば変遷した。

地理学者米倉二郎氏の説によれば、最も古くは巨勢川から佐賀江湖を流れたこともあろう。(土壌は脊振山塊より流出したとみられる花崗岩質のものが多い)。肥前国府は現在の佐賀郡大和町に営まれていた。国府が内陸にあ

図4　嘉瀬川河道変遷図



る場合、近くに外港として国府津をおき、これを大津と称した。諸富町の大津はこれに当たり、国府間に佐嘉川をもって舟運があった」と推定しておられる。

昭和五十七年、徳富の権現堂遺跡から、多くの土師器、青磁片が発掘され、話題を呼んだが、これらは奈良時代初期、河口の三角洲上にできた小集落とみられる。大化改新(六四六)以後、豪族の領有した私有の土地、人民をすべて公地、公民とした班田収授の法が施行された。この具体的なものとして条里制が実施され、本町でもその遺構がみられる。この制度は、畦畔と共に水路によって耕地を整然と区画され、筑後川河畔の諸富、為重の背後まで南下して、当時の開発の南限とみられる。

中世の開発は筑後川沿岸の自然陸化にともなう小規模な干拓が行われたものとみられる。「干拓」ということばが使われはじめたのは、明治以後のごく最近のことである。それ以前は「搦(からみ)」「籠(こもり)」「開(ひらき)」などと呼ばれ、干拓の名称がそのまま地名となっているところもある。本町の

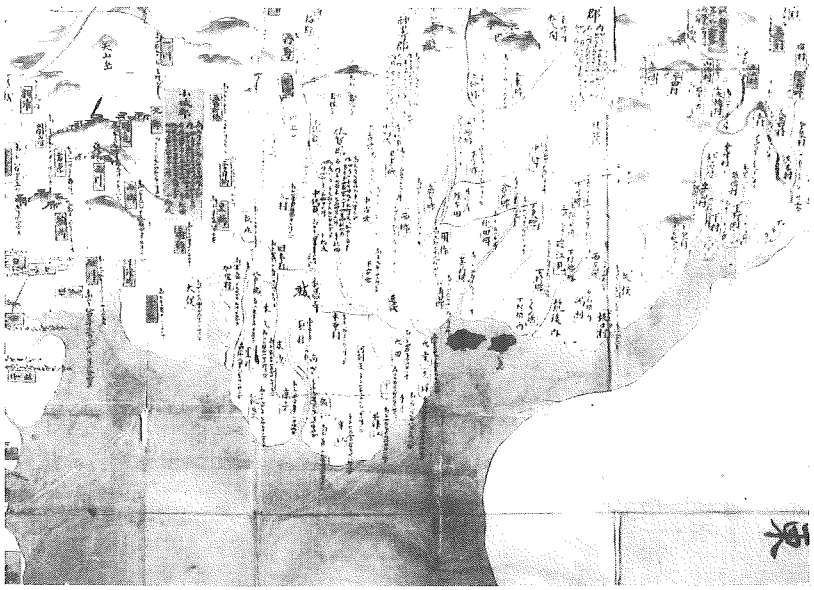
場合、小字名に搦名のついたものが多い。

干拓を定義づけると「湖沼または河海に築堤その他の工事を行って、内部を排除して土地を造成すること」をいうが、類似のものに埋め立てがある。しかし埋め立ては原則として、他所から土砂を運んで地盤を高めることであるので、正確には両者は区別すべきである。

『有明干拓史』の千手正美氏によると、干拓が行われるようになったのは、鎌倉時代末期以後で、その理由は元寇後の恩賞地の不足のため、新田開発が必要であったとしている。干拓が文献にみえるのは、正応元年（一二八八）佐賀郡川副町の南里から米納津付近の干潟を佐賀郡大和町にある高城寺に寄進するという古文書が残っている。また隣りの福岡県関係では、大川市酒見の風浪神社筋にあたる浄土寺の古文書に柳川市付近の荒れ地を寄進したという乾元三年（一三〇三）年号の文書が残っている。

これらの寄進状からみれば、干潟は寄付するにたる経済的価値を持っていたわけで、これまでのように、自然陸化を待つというのでなく、干拓という積極的な土地開発がとられたと推察される。しかし、当時の新田開発は干拓工事という程の大規模なものではなく、常時海面上にあって、高潮の時以外は水害の恐れのない葦原を開き、前面に簡単な土手を築く程度のもので、自然の沖積作用に多く依存していたものとみられる。

干拓が本格的に行われるようになったのは、戦国時代ころからで、土師にいた右近氏、大堂の諸富氏、福田の垣内氏、太田の太田氏、山領の村岡氏などがそれぞれ定着し、地方武士として、水利の権をにぎり、防衛のために濠をめぐらした環濠集落をつくった。これらの豪族も土地開発については力を注ぎ、本町については、筑後川や佐賀江湖沿岸部の一部を除き、この時代に開発の手がつけられた。しかし、当時はまだ築堤技術なども未熟で、



慶長年中肥前国絵図（筑後川河口付近）

高潮災害などには無力であった。本格的な松土居ができるようになるのは、江戸時代に入ってからのことになる。

戦国時代末期の海岸線は海抜二メートル三〇センチくらいのところで、本町の寺井津から早津江、小々森、広江、住吉、大野、丸目、嘉瀬新村を結ぶ線が当時の有明海の海岸線と推定されている。

『慶長年中肥前国絵図』（別写真）によって、筑後川沿いを眺めてみると、江見の下に「下村郷」、その下に「こもの郷」、その西の神埼郡下東郷と「蒲田郷」の地先に「りんけい島」「黒角」という二つの河中島が記されている。この絵図には大中島も大詫間島もみえない。川副町の鹿江が最南端に記され、犬井道の地名はみられない。河中島の「りんけい島」は今日の林慶、「黒角」は黒津となって陸地化されているが、当時は筑後川も川幅広く、その中の中洲のような島で、まだ人が住していない。

この絵図には慶長検地後の石高が地名の横に記されているので、本町関係分を記してみる。

河副庄　高千七百五十六石八斗一升六合
大(太)田　高二千四百九石五斗二升
大　堂　高千三百五十二石六斗七升四合
走(橋)津　高千五百三十五石二斗四升七合
三　重　高二千百三十三石七斗六升
寺　井　高二百八拾七石八斗七升八合

近世　佐賀藩政が確立すると、成富兵庫らが中心となって佐賀藩領内の治水工事に力を入れられたことはよく知られている。

本町でも成富兵庫の事業は佐賀江湖と新川の改修であった。明治四十四年の『東川副村沿革誌』によると「戦国群雄割拠ノ時代、江湖ノ流レハ高尾ヨリ来リ、東西村ノ北長林ニ副ツテ東流シ、南ニ折レテ蓮池ノ西ヲ通リ、陣ノ内村ニ至リ、又東ニ折レテ小曲村ノ南ヲ走ツテ大堂ニ達セリ（中略）今日蓮池村界を流ル江湖ハ、鍋島ノ代トナリテ水利ニ迂回シテ今ノ如ク掘リ改メタルモノナリ」とあるように、佐賀江湖の洪水貯水能力を大きくすると共に、佐賀城下の運河として利用するために、江湖の開鑿を行ったことがわかる。また、佐賀江湖だけでは内水排除がむつかしいので、佐賀江湖から分流南下する放水路を考えた。これが新川である。この新川は真田真蔵著の『成富兵庫の治水』によると「元和年中犬尾のかんすのつると名詮せる処より、新川を掘さくし樋管及び野越を設けて、これを放水路となし、千歳川合流に迂回する悪水を南方寺井津より早津江川に直流せしむるために

成れり」とあって、江戸時代初期ころより、本町内では大規模な河川改修が行われた。これらの河川や水利については　(六)河川・クリークの項で詳述するが、江戸時代に入って急速に域内の開発が進んだ。元禄十四年（一七〇一）の肥前国絵図には、福田・山領・加与丁・太田・大津・小杭・大堂・徳富・諸富・石塚・寺井・野町・三重・浮盃・大中島の十五ヵ村が描かれている。この中で浮盃と大中島には石盛りがなく、新立の村落であることがわかる。

幕末の天保十五年（一八四四）三丁分に東流していた佐賀江湖を現在の流路に変更する大規模な河川改修が、佐賀藩郷普請方の手によって実施された。またこれらの改修にともなって、域内の湿地の乾田化や旧河川敷の干拓が進み、小規模な溜が多く誕生した。（表3の町内小字名参照）

2　集落からみた開発の推移

諸富平地で集落を形成するためには、まず飲料水の確保と宅地は高燥である必要があり、また災害や防衛的な意味も考慮されなくてはならない。

戦国時代、本町に根拠を構えた小田氏や太田氏などは堀をめぐらした環濠集落を形成したものとみられる。当時の平地内は溝渠が多く、陸上交通はきわめて不便で、物資の運搬等はほとんど水運によったものとみられる。平野における主要部落は、河津として成長したものが多い。本町の上大津、下大津などは、諸富津、舟津などがなかった戦国以前の舟付場とみられる。これらの津部落は筑後川や佐賀江湖の潮留堤防線の中心として発達したもので、徳富本村にしても元村・江越・野中の線がもとの佐賀江湖の堤防線であったころ出来た集落と思われる。

したがってこれらの集落は最初堤防上街村の形で発達したものとみられる。

小曲・片平・石井小路などは小田城設置や蓮池城設置のときにできた城下町の名残りであり、武家の没落によって一般の農村集落化したものである。

大堂村、大堂新村、諸富新村、陣内などは農耕地として散村の形で発達しているが、大堂は当初は大堂神社を中心に出来た集落とみられる。

江戸時代の古歌に「野田は川端、橋津は都、花の諸富色どころ」というのがあるが、かつて水運によって、これらの河津がにぎわったことがわかる。

次に旧新北村に属する三重津、寺井津は近世佐賀藩の重要な河口津と発達したところである。三重には川副郷を統轄する代官所が設置されていた。寺井津は近世の中頃、諸富港沿岸が淺瀬となり、港としての機能を弱めたため、寺井津や早津江の方に河港の中心が移り、寺井津と諫早を線ぶ定期船の発着場として知られたところでもある。

本町の集落の発達を要約すると、筑後川の土砂の堆積と有明海の陸化による海岸線の南下によって、集落は北から南に次第に南下して発達していった。

弥生時代末期の権現堂遺跡などは、筑後川河口にできた三角洲の上に一時的に営まれた集落とみられる。奈良時代以後は、有明海の堤塘集落として、当初、佐賀江湖線あたりに集落が形成され、大津などの河口津の発達をみた。その後荘園制の発達や戦国の地方豪族の台頭によって、環濠集落が発達した。近世、筑後川護岸のため、佐賀藩新地方による大規模な本土居の構築が行われ、平地内での湿地の乾田化や江湖筋の干拓が進み、農耕地に

利便な集落形成がはかられるようになった。今日の主要集落は、江戸時代中期には殆ど確立していた。

(四) 筑後川の変遷

1 筑後川の自然

筑後川は古く筑紫次郎と称せられ、遠く九州の屋根、九重山、阿蘇山に源を発する九州の第一の大河で、本町の東側と南を流れ、有明海に注いでいる。本流一四一キロメートル、流域面積二、八六〇平方キロにおよんでいる。

大昔、有明海と瀬戸内海を結ぶ海峡があったものが、阿蘇の噴火や地殻の変動によって陸続きとなり、その名残りにできたのが、筑後川だといわれている。しかし、福岡県の水縄山地の断層崖などは、伊万里と四国の松山を結ぶ地質構造線上にあって、地溝帯をつくり、筑後川はその中を流れている。東の方では矢部川を中心とする扇状地、西側では嘉瀬川、城原川などの扇状地を結び、こうした川の沖積作用と筑後川自身の極めて大きな沖積作用によって、筑後川下流平野の肥沃なデルタ地帯をつくり、有明海の海退と一緒になって、海を南へ南へと追いやっていった。

筑後川は河川の勾配、地質などからみて、福岡、大分県境にある夜明ダムまでを上流部、夜明ダムから久留米市の瀬の下までを中流部、それから有明海に至る河口部までを下流部と大別されている。

本町は下流部に当たる。この川は地溝帯を流れているので、平野部の一番低いところにある。したがって、洪

筑後川河口付近　(昭和30年ころ)

水などで堤防が決壊して、一時的に河水があふれても、その水は再び筑後川にもどることになる。下流部は沖積平野を貫流するため一般的に蛇行する性質をもっているほか、有明海の干満の影響を受けている。有明海湾奥部は日本でもっとも干満差の大きい海域で、大潮時の干満差は五㍍を越える。河口より上流の本町諸富付近で、干満差三・五㍍、更に瀬の下付近まで水位は影響する。満ち潮は筑後川の水をせき上げ、流れは止まり、浮泥を沈積させる。引き潮は大きい水面勾配をつくり急流となる。そのため河床は洗掘され、河口深部ではマイナス五㍍の深溝を削っている。

下流部には田手川・城原川などの支流が注いでいるが、周縁耕地の肥沃な土も筑後川に流れ、引き潮に乗って有明海に運搬される。このため沿岸には干潟が形成されるが、これら干潟の中を筑後川の水みちである澪が流れている。澪は干潟の流路であり、航路でもある。筑後川は澪としてはるか沖合いまでその流路を残している。

筑後川は大河で堤防のなかった江戸時代初期頃までは、洪水ごとに荒れるにまかせ、豊かな耕地も一夜にして変ぼうさせることがあった。そのため一夜川とも呼ばれた。しかしこの川は上流に日田盆地をはじめ大小の盆地

をもち、盆地の出口が狭搾されて土砂礫の多くは盆地付近に堆積するため、土砂の運搬が少なくない。本流は平野の一番低いところを流れているので、本流から溢れた洪水は再び本流にもどるため、河道が変わることはなかった。その証拠として昭和二十八年の洪水は、近世以来最大規模の洪水といわれ、筑後川寄りの低地は一面の泥海となり、本町の搦地区などでは二㍍を超える水深となった。だが水が引くと流れの速いところは土が削られ、流れの遅いところには土砂が堆積した。しかし筑後川本流に相当するような別の河道は形成されず、筑後川堤防の背後に流れの跡を示す水筋が数条できたにすぎなかった。このことは明治二十二年、大正十年の大洪水でも同じであった。

このように筑後川の性質として、自然の流路をあまり変えないが、佐賀県北茂安町付近からは屈曲が多く、蛇行の凸では水衝のため、堤防が破壊されやすく水害の原因となるため、明治に入って人為的に水路をショートカットする放水路工事が盛んに行われ、以前の屈曲した河身が現在の河道の近くにゆるいカーブを残して残存している。明治以前の治水工事は体系的に行われる今日の治水計画とは異なり、まず城下や重要な街、農耕地を守ることに重点が置かれた。

筑後川全般の水利の変遷などについては『筑後川農業水利誌』(九州農政局筑後川水系農業水利調査事務所編)などに詳しいので、参照願いたい。

2　筑後川開発をめぐる政争

筑後川は旺盛な沖積力を発揮して、多くの砂州を発達させ、今日の福岡県の下田・芦塚・浮島・道海島などが

現われはじめたのは、近世の初頭とみられている。当時、肥前側は鍋島氏、筑後側は田中氏（のちに有馬氏・立花氏となる）

慶長五年（一六〇〇）関ヶ原役が終わり、大功があった田中吉政（一五四八～一六〇九）が筑後三二万五〇〇〇石の大名として、柳河に入部した。吉政は近江（滋賀県）の農村出身の大名で、水利土木にすぐれ、さっそく筑後川の開発にかかり、肥前側を圧倒したのである。

『三瀦郡誌』には浮島と道海島について、次のように記されている。

「浮島はもと川中の潟洲なりしを菊池十左衛門、慶長十年本郡（三瀦郡）に来り、名を惣右衛門と改め、開墾に着手せしに、対岸肥前の人民来りて之を妨けんとせしも之を斥け、江島村と称し、慶長十五年江島村の所轄となせしが、天和三年惣右衛門一家此島に移住し、有喜島と改称し、寛永年中村名を浮島と改め以って今日に至れり」

「道海島は文禄年間本郡（三瀦郡）中古賀村の人、緒方将監と云ふ者、筑後川沿岸斥鹵の地を闢き数年にして七町余の田を得、之れを潟島と名づく、後慶長十五年村民を率い肥前人と争闘して、対岸芦萩の地を開拓して、更に五十余の耕地を作り、中古賀村民を移して一村落を形成せり、即ち道海島なり」と記されている。

『慶長年中肥前国絵図』によればこの二島は、肥前側に「りんけい島」「黒角（島の誤まり）」とみえる。これは現在の神埼郡千代田町林慶と黒津に当たり、当然肥前側の領地に帰すのが当然であったが、筑後民の前掲の記事にもあるように、肥前人と激烈な闘争に打ち勝って、筑後領となった。なお、肥前国絵図には三根町江見の南にある芦塚も当初肥前領に入っているが途中、筑後側に侵略され、今日、いずれも福岡県側に入っている。

このように近世初期、筑後川の沿岸湿地の開発は筑後側の進出が肥前側を凌いだ。これは肥前の農民がおくれ

筑後川河口大詫間（昭和40年ころ撮影）

をとったのではなく、当時、佐賀藩主鍋島氏は、関ヶ原の戦いに西軍側に属して罪を得たのに対して、筑後側の田中吉政は石田三成を捕えた武功者で、徳川氏に対する親疎は異なり、筑後川沿岸における両藩の力関係は、田中氏の方が数段上で、筑後側の思うままに進められる結果となった。これは今日の筑後川沿岸の県境線をみても明らかなことである。

次いでに大野島と大詫間島についてふれておこう。現在は一島になっているが、もともとは二島であった。この島も江戸時代、佐賀藩と柳河藩に分かれ、長い間勢力争いがなされたところである。

大野島は『有明干拓史』によると「慶長六年（一六〇一）筑後藩士津村三郎左衛門が数十町の潟地を干拓、元和二年（一六一六）大野島と称した。正保二年（一六四五）の筑後絵図には三一戸の散村をなし、二宇の神祠がある。同島の開発も小規模な集積と考えられる」とある。

大詫間島は「天正年間までは〝松枝沖〟と称された海で、慶長年中肥前国絵図にもみえない。大詫間に伝えられる八大竜王社記によると、鍋島勝茂が大野島の寄洲に占有権を示す竜王の神石を建て、その神石を中心に土砂が堆積、土質が団

結したので、元和九年（一六二四）八大竜王の神祠を建てた。寛永のころ干潟が成長して、肥筑の境界争いが起きた。正保年間（一六四四～四七）肥筑の和議が成立、千栗八幡の神幣を流して境界を決定した。その時、佐賀城下白山町の武屋（武富家）の先祖が竜王社の北東に当たる泥土地に搦五十町を築いて、大詫間村の村号を称した」とある。

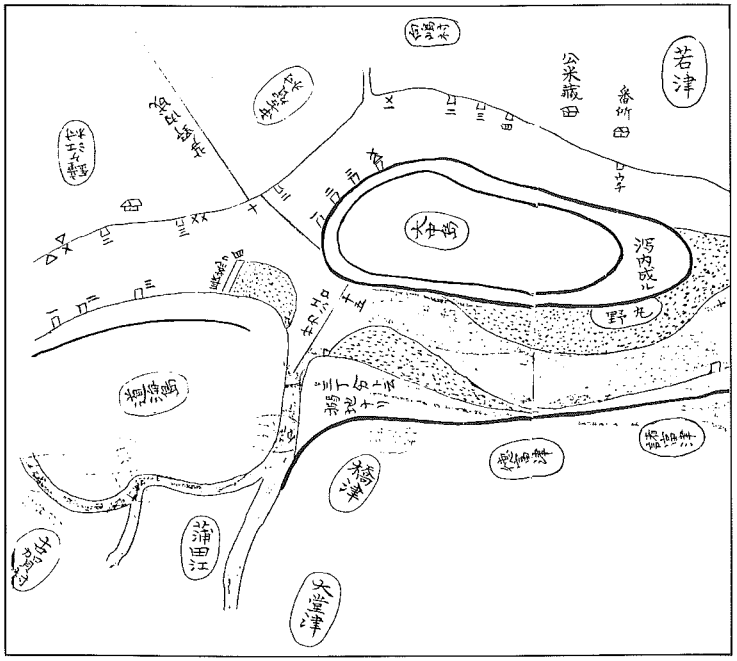
本町の大中島は正保四年（一六四七）の肥前国絵図にみえるが、川の中洲の小島のため、洪水などの危険性もあってか、幕末まで人家がなく、舟で耕作に出掛けたものとみられているが、郷村帳などには石盛りが記されていない。

大中島・大野島などの三角洲ができたころから筑後川は分流しはじめた。本流は大中島・大野島の西を流れ、東の流れを「洗い切り」といっていた。したがって最初は現在の早津江川が本流であった。それがいつの間にか、「洗い切り」の方が本流に移ってしまい、名前も早津江川と呼ばれるようになった。

天保五年（一八三四）佐賀藩士南部長恒（一七九一～一八五九）が行った河川研究書、『疏導要書』には次のような記述がある。

「先年（天保初年）久留米領若津と云ふ所に問屋を立て、船着を賑はさんと川西道海島の水当たりに百六拾間程の荒籠を築出し、西に当たる水を東へ刎ねさせ、右若津江に引落しける故水上より落集る水此荒籠に支へ、猶又滞る様に相成り惣じて御城下多布施川より東三根・養父迄の間、御領内の山々より打出す川筋も十余筋直に大河に打出すもあり、又佐賀江に落入りて打出すもあり、皆々速に引落すことなれ共降雨数日に及ぶときは、御領内の川口より落下する水と大河の水と、又南海より満ち上る潮とに支へ、佐賀江より三根・養父・神埼道下の所

図5　『疏導要書』にみえる大中島付近



扱て又久留米田代の村々人家軒をひたし数里の間一面に大海の如くにて作民の困難掲げて数へがたきにより、公訴を奉りし末、三四十ヶ年以前、萬年何某と云ふ御旗本下向ありて、右の道海荒籠を半ば取除けられしも水至って深く数万の石を入れし荒籠なれば中々水底まで悉く取除くことかなはずして、其功を空くするにより思ふままに水害を除くことにあたわず」

久留米藩が道海島に長い荒籠を築いたのは、下流の大中島を挟み、対岸の若津港を本流、諸富港側を支流とするような狙いがあり、この結果諸富港沿岸はしだいに浅瀬となり、港としての機能を弱めた。一方、佐賀江湖の排水も思うようにならず、天保十五年（一八四四）三丁分の方に排水していた河道を現在の大堂川筋に新しく堀切りの大工事を実施し、三丁分が島のような形になった。（詳細は近世編参照）

このように近世の筑後川筋の開発は、筑後領との政治的なかかわり合いが大きかったことが特出される。なお、川筋に與助搦・善之允搦・

納右衛門搦・八郎右衛門搦・勘左衛門搦・松左衛門搦・新左衛門搦など搦の名に人名を付した小規模の干拓がつくられ、域内の開発が急速に進められた。

明治二十一年から筑後川には、内務省の手による国の直轄工事がはじまる。明治二十三年三月内務大臣宛東川副村長による道海荒籠切ちぢめの願が出され、沈床除却工事がなされる。昭和二十八年筑後川大災害の同荒籠復旧工事が柳川土木事務所の手で行われるに当たって、三十年八月二日東川副村長重松初次と大川市長龍野喜一郎との間の誓約書が交され、この工事が大中島上流側尖端の灌漑用水樋の引込口に支障がないこと、支障があれば、土砂を除くと一札がいれられた。

このように、旧藩時代からの地先主義的工事の害悪を除き、筑後川全川にわたって根本的な改修が要望されていたが、明治十七年、ようやく河口～日田市隈町約二二里の間にやや統一された工事が計画された。費用負担をめぐって福岡・佐賀両県の間の対立があり、明治二十年起工となった。当時の佐賀筑後平野の産業文化には、主として筑後川を利用した舟運に頼っていたため舟運を目的とした低水工事（河身改修）におかれ、あわせて出水防禦（高水工事）が行われ、荒籠駆除、航路岩石取除、干潟によって澪筋がつまっているので、本流の河口を維持するために、本川の河口に明治二十五年頃、和蘭人デレーゲの設計になる延々五キロにおよぶ導流堤をつくって、河川の維持に当たったのである。

農業水利の面では、水の利用と管理とが、実体的に規定しにくく、福岡・佐賀両県の間で、水法関係の成文化はあまり進まず、これらが解決の目途がついたのは戦後になってからのことである。

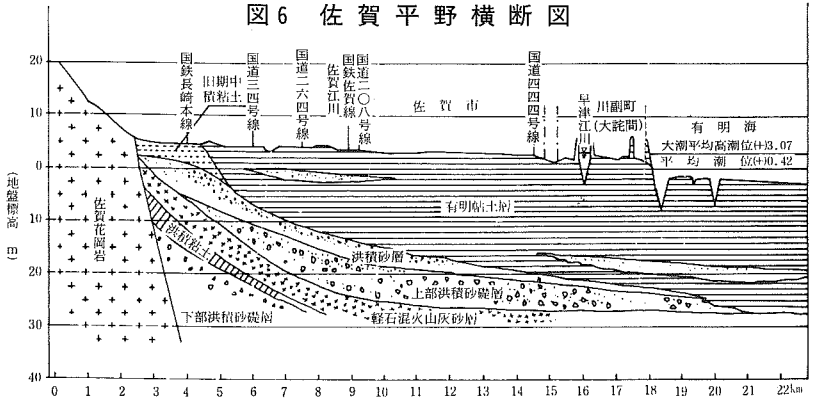
(五) 地形・地質・土壌

1 地形

佐賀平野横断図（図6）をみればわかるように、平野部は有明海粘土層からなる低平な沖積平野である。有明海の堤防の高さや潮位線から考えて、いま仮に堤防が決壊してなくなったとすると、海水は佐賀市内まで浸水することになる。つまりこの浸水地域の大部分が干拓によって生成された新しい土地柄である。

本町の場合、寺井の樋門から新川を逆流して、佐賀江湖の尾の島井樋まで潮汐が上下していることでも証明できる。地形の勾配（傾斜）がきわめてゆるやかで、肉眼で高低を判断することはできない。旧江湖筋はクリークになっているところが多い。詳細な地図による微高地はかつて自然堤防や砂洲があったところとみられる。ただ筑後川および城原川、佐賀江湖の堤防は、内部平地を護るため、三～五㍍ほど土盛りをみせている。

図6 佐賀平野横断図

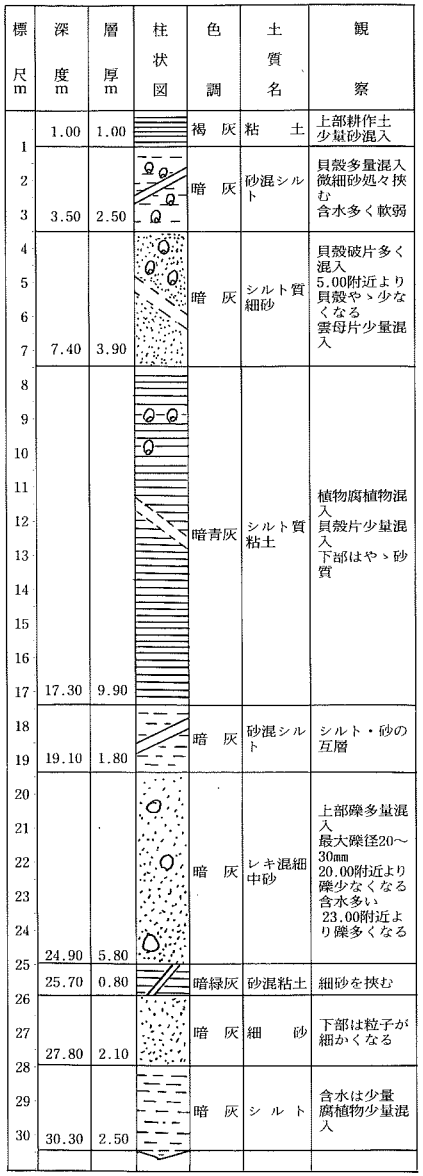


2 地　質

昭和四十八年、諸富南小学校建設のための基礎調査として、東建地質調査株式会社による地質調査を実施した。その結果を紹介する。場所は本町の為重である。

調査地の地質構成は地質断面図（図7）に示されたとおりであるが、大別すると七層に分けられる。この中で第一粘土層、第一砂層および第二粘土層は、いわゆる有明粘土層と呼ばれているもので、他の地域よりやや薄く、一九㍍程度である。下限は中位の礫混り細中砂に接している。最下部は砂分を含むようになり、深度三五㍍付近に厚さ約四㍍の細砂をはさんでいる。全体として貝殻片を混入する暗灰色～暗青色のシルト質粘土である。そのすぐ下の礫混りの粘土層が接しており、この層は細砂をレン状にはさんでいる。

図7　土地柱状図



3 土　壌

本町の土壌は脊振山塊の花崗岩、高良山塊の古生層、筑後川上流の安山岩などを母岩として生成された沖積層である。北部は砂礫土、壌質埴土で、南部にいくに従って重粘な埴土となっている。地味は肥沃であるが、有機質を多く含む土層のため、地下水は不良で、井戸による良質の飲料水を得ることはできない。幸い堀や溝渠が自由に発達しているため、古くは川水を飲料にすることが多かった。

農業の面から乾田、湿田の分布をみると佐賀江湖筋と筑後川筋に湿田が多く、酸性度も高い。昭和三十二年の調査による乾湿田別反別は表4のとおりで、南地区に湿田が多かったことがわかる。

昭和三十二年佐賀県農業試験場で調査した『佐賀県佐賀平坦地域土壌区分図』の説明書によると本町の土壌は、次のように記されている。

本地区は有明海の浮泥と、筑後川及び其他の小河川によって運搬された土砂の堆積によって形成された沖積層で、土性は殆どSiC～HCである。水田は標高三㍍以下の平坦地であるが、排水は一般に良い。これは水田の周辺を囲繞する溝渠と、下層の柱状構造の発達によるものである。但し新干拓地並に一部には地下水高く、一㍍以内

表4　耕地の乾湿田別調

（昭和32年調査）

区分 / 地名	耕地面積	百分比	普通田	百分比	干害地	百分比	湿地田	百分比
	反	%	反	%	反	%	反	%
北地区	3,641	100	3,424	94.0	17	0.5	200	5.5
南地区	3,172	100	2,638	83.1	14	0.4	520	16.45
計	6,813	100	6,062	88.9	31	0.5	720	10.6

資料：諸富町建設計画書

にグライ層の生成をみるところもある。

次に各土壌区の概要を述べる。

1　60b・強粘土構造型

この土壌区は本調査地区の北部にあり、陸化年次が古く、ほぼ一〇〇〇年前頃に自然陸化されたものと推定される。地下水位が低く排水良好で、グライ層は一㍍以下である。

土層断面には作土下に暗褐色の鉄の糸状斑、暗紫褐色の斑点、結核の沈積に富んでいる。作土は一般に浅く、一〇～一二㌢程度で土性はLiC～SiCである。下層に柱状構造の発達が著しく、その劈面は粘土の被膜がみられる。水稲根の分布は著しく、よく下層まで達している。水稲の生産力は極めて高い。

2　61・粘土質構造満俺型

この土壌区は本地区に最も広く分布し、前者の60b型に次いで自然的、人為的に陸化されたところである。地下水位は前者に次いで低く、排水は比較的良好でグライ層は一㍍前後か、一㍍以下である。土性は殆どSiCである。土層の断面形態は作土下に、暗紫褐色の斑点、結核に頗る富み、黄褐～赤褐色の鉄の沈積は極めて少ない。柱状構造の

図8　土壌区分図

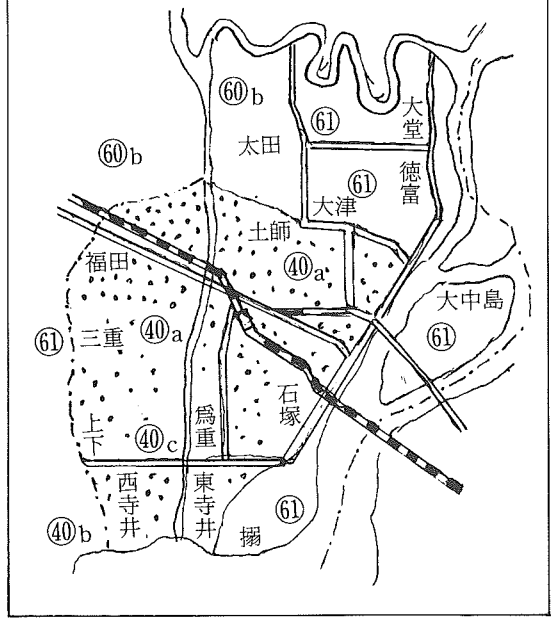


表5　土壌構造の形態

土壌区名	採取地点	層位	粗砂 %	細砂 %	砂合計 %	微砂 %	粘土 %	国際法による粒形組成
60*b* 強粘土構造型	佐賀市北川副町	I	3.5	26.6	30.1	52.7	17.0	*SiCL*
		II	0.5	20.4	20.9	46.4	32.3	*SiC*
		III	0.2	17.3	17.5	49.8	31.8	〃
	諸富町(東川副)	I	1.7	25.5	27.2	48.1	24.3	*SiCL*
		II	1.4	14.6	16.0	50.8	32.5	*SiC*
		III	0.4	15.1	15.5	45.2	36.6	〃
61 粘土質構造満俺型	西川副村	I	0.6	14.9	15.5	50.5	35.6	*SiC*
		II	0.4	23.6	24.0	47.4	31.3	〃
		III	0.2	21.2	21.4	41.2	37.4	*LiC*
	川副町(南川副)	I	0.8	21.9	22.7	44.9	32.2	*SiC*
		II	0.3	20.6	20.9	41.8	36.5	*SiCL*
		III	0.2	17.8	18.0	41.6	37.8	*LiC*
	川副町(大詫間)	I	0.7	15.5	16.2	48.5	28.3	*SiC*
		II	0.4	14.3	14.7	45.6	36.8	〃
		III	0.2	15.4	15.6	42.9	40.8	*LiC*
40*a* 構造強粘土型	諸富町(新北)	I	0.6	21.6	22.2	45.9	32.2	*SiC*
		II	0.4	19.8	20.2	47.0	33.1	〃
		III	0.2	14.6	14.8	40.8	45.2	*HC*
40*b* 強粘土構造型	川副町(大詫間)	I	0.6	16.4	17.0	47.3	35.5	*SiC*
		II	0.3	23.1	23.4	46.0	33.3	〃
		III	0.3	19.2	19.5	44.1	35.8	*LiC*
	川副町(中川副)	I	0.3	30.2	30.5	45.9	28.4	*SiC*
		II	0.2	26.3	26.5	34.7	40.3	*LiC*
		III	0.2	19.6	19.8	45.3	45.5	*HC*
40*c* 構造強粘土型	諸富町(東川副)	I	1.9	26.7	28.6	50.8	20.0	*SiCL*
		II	0.4	23.0	23.4	46.5	29.3	*SiC*
		III	1.3	23.6	24.9	43.0	32.8	*LiC*

発達は前者と同様に著しく、作土下の塩基含量は前者より高い傾向を示す。水稲の生産力は前者よりもやや高い。

3　40a・強粘土構造型

この土壌型は諸富町の一部に分布し、陸化年次は60b型に次いで古く、自然陸化により生成されたものである。排水は60b型、61型よりやや悪く、70～80㌢にグライ層がある。土層断面の形態は作土下に黄褐色及至暗褐色の糸状膜状の斑紋と暗紫褐色の斑点及び結核があるが、60b型に比して少なく、作土下は黄橙色～黄褐色の雲状斑にて、一面染色されているのが特徴である。この土壌区には弾丸暗渠排水を実施したところが多い。水稲の生産力は60b型に比して大差はないようである。

4　40b・強粘土構造型

筑後川の三角州である川副町大詫間の北部と、同じく川副町の早津江、鹿江、小々森を結ぶ線に一キロメートルの幅に分布する。断面形態は40aに類似し、70～80にグライ層を見るが、40a型が地下水の移動によるものであろうと推測される雲状斑によって、グライ層上位が一面染色され、一見暗黄色乃至黄褐色に見えるのに対して、この土壌区には、黄橙色の脈状斑の存在することである。また早津江、小々森の線には、50～100の間におびただしく管状結塊を有することである。水稲の生産力は40aに勝るようである。

5　40C・強粘土構造型

諸富町の南部付近の小面積に分布する。この土壌区の南部は筑後川の分流早津江の堤塘に接するため、南部が高く排水が良くない。グライ層は60～80㌢にあり、前者よりやや高く、半乾乃至半湿田が多い。土壌断面の形態は前二者と異なり、斑紋、結核に乏しく、雲状斑が多い。水稲の生産力は40a、40bよりやや劣るようである。

なお、この調査は土壌条件を調査し、農業の施肥技術の効率化をはかるために実施されたもので、現在では土壌改良がかなり進んでいる。

(六)　河川・クリーク

1　諸富町をめぐる水構造

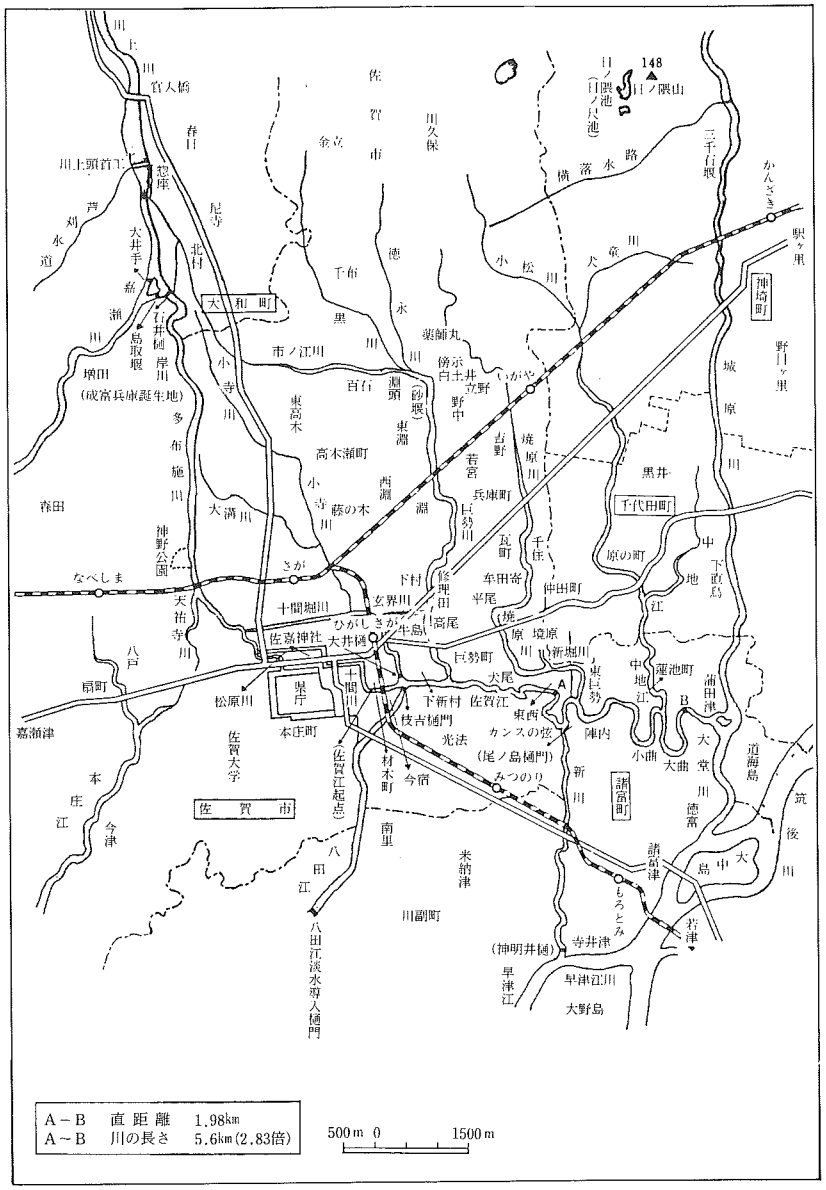
本町の水構造を考える場合、筑後川と佐賀江湖を大動脈とし、新川とクリークを血管とする水構造からなっている。その点や線や面の上に、津・中島・農村があり、これらはいずれも水によって結びつけられている。

近世の交通は、〝物は水上、人は陸〟というのが通例で、城下町を建設するについても、湾内を海に面し、水上輸送の可能な河川を考慮して構築された。

佐賀城下の場合も筑後川と結びつけて、佐賀江湖を城下の運河とした。この運河の開通は、諸富地区を、佐賀城下の外港として、藩米の積出港とした。また、南の寺井津は、本庄江湖の今津とともに、水路による長崎への発着地となった。

長崎街道は神埼町から城原川の堤防を南下して、原ノ町、高尾(ここで巨勢川を横断)、牛島に出て、大溝川を渡って城下に入る。大溝川は佐賀城下の外濠となる。慶長町(現牛島町)を経て、佐賀江湖の上流を渡れば、思案橋である。柳町、蓮池町、白山町、米屋町、伊勢屋町などを経て、八戸町に至り、本庄江湖を渡る。ここが高橋であり、西に進んで嘉瀬津に至る。これによってもわかるように佐賀江湖は、佐賀平野の水陸交通の結び目となっていた。

図9　佐賀平野主要河川図



A－B　直距離　1.98km
A～B　川の長さ　5.6km(2.83倍)
500m 0　1500m

舟運のためには、佐賀江湖、八田江湖などの江湖は感潮河川であるため便利であるが、飲料水源や農業用水としては、多布施川水系の清水をつかう必要があった。そのため有明海の潮の間接的影響は避けられないとしても、直接的影響を避ける工夫がなされてきた。それが樋管や堰、水門、水路、暗渠などによって配慮された。佐賀水道といえる多布施川と、これらの江湖とは、微妙な連続の非連続という形をとっている。特に八田江湖は、南の有明海から佐賀城下町に直通する江湖であるところから、城下との直通を断ち切る隠れ江湖とされた。佐賀市本庄町大井樋から中島までの古江湖川がその残骸として残されている。

八田江湖の江頭（江湖の起点）から佐賀江湖の間を川副地区に通じる七本の幹線水路（流れ堀という。多布施川の末流の安住川、古賀川、大崎川など）が流れている。

城下町の北限を東西に限る十間川、武家地区と町人町の境となる裏十間川、佐賀江湖と城濠を結ぶ北十間端川、城内を囲む幅四〇間の城濠は、その名のとおりの川幅を持ち、佐賀城の外濠、内濠という性質と共に、洪水調節の遊水池のはたらきをもたされていた。

佐賀江湖は暗渠によって、裏十間川、北十間端川と結ばれ、佐賀運河としての機能を果たしてきた。それと同時に、主として裏十間川以北の多布施川以東、巨勢川間の排水負担を、これまでの巨勢川、黒川、市ノ江川の排水機能に加えられた。それは運河としての舟運の水深を維持するには都合のいいことであった。しかし排水では問題であった。

佐賀江湖の川幅を拡げれば、排水能力は大きくなるが、水深が浅くなり、舟運及び農業用水の取入に差しつかえる。そこで上流の巨勢川、黒川合流点一帯に、金立村沖田遊水地、東渕遊水地、現在の佐賀市塵芥処理場近く

の野越と遊水地が設けられた。佐賀江湖の両岸には、高水敷を水田とする無米地、河成田がおかれた。蓮池城の外濠及び洪水調節の役割をもたせるために、江湖本来の蛇行に加えて、極度の蛇行が加えられ、河道を延長することで、河積を増大させた。そして中間排水路としての新川を開いた。その上、大溝川、巨勢川間の兵庫町巨勢以西と巨勢町新村の湿地帯の水を巨勢川に抜くため、十間堀川を掘り、これを動円橋で巨勢川に落した。これによって、兵庫の下村、巨勢の新村の芦野が開発された。十間堀川は湿抜きには役立つが、洪水時には巨勢川の水位が高いので、逆に巨勢川の水勢に押される。

そこで旧春日村、高木瀬村、兵庫村、巨勢村の巨勢川以西地域の新川排水への期待は極めて大きかった。これらの村々は、新川の起点尾ノ島の三丁井樋に対して、その維持管理について、井樋見料、修繕料を負担した。さらに巨勢川動円橋から尾ノ島までの間の巨勢川（佐賀江湖）の芦切り、川浚えを公役によって行っていた。

こうした排水のための公役は、八田江湖、中地江、田手川、鯰江で行われ、この年中行事を芦刈りと呼んだ。中地江、田手川、鯰江では、田手川に建設省の手による本格的な改修が加えられる昭和四十年代まで続けられていた。

遊水地旧金立村沖田では、洪水に備えて、揚げ舟を用意していた。鳥栖から三根町にかけての筑後川沿いでは、小学校にも揚げ舟の用意があった。屋敷や家畜小屋は、土盛の上に建てられ、このような構造を水屋と呼ばれた。佐賀江湖では舟運による水の流れを確保し、潟でつまらないために、荒籠をつくった。現在でも蓮池公園地区になごりがみられる。佐賀江湖には、南岸前方に、河成田の遊水地をおいた潮土居を設けた。これらは水制のため、成富兵庫が設計したものと伝えられている。

2　佐賀江湖とその水利

空からみた佐賀江湖の蛇行

佐賀江川ともいう。江湖の特徴ははっきりした水源を持たないこと、即ち上流を持たない河川で、潮の上下する川と定義できる。したがって川尻をみただけでは、直接有明海に注ぐ川と区別はむつかしい。しかし流れをさかのぼってゆけば、そこには川らしさを失って、クリークにつながったりしている。しかしそのまま、すんなりつながるのではなく、そこにはこれを結びつける樋門がある。そこで引き潮の時には江湖の水位は、河身を支えるだけの浅い水深となるが、満潮時には堤防いっぱいにあふれる。

佐賀江湖の特徴について、本町出身のテトラボットＫＫ会長江口辰五郎氏と佐賀市巨勢町在住の福岡大学教授宮地米蔵氏の共著になる『佐賀平野の水と土』の中から佐賀江湖と新川の部分を引用させていただくことにする。

佐賀江湖は、多布施川の末流の十間堀川以北をうけて佐賀市今宿から発し、旧海岸線沿いに、佐賀江以北の川とクリー

クの排水を一手にうけて、筑後川にむかって蛇行しながら東西に流れる一三㌔の江湖である。それは文字通り東西に流れる佐賀平野の中間排水路川である。同時に、典型的な淡水取水の江湖であり、また逆潮を利用して佐賀城下と有明海を結ぶ運河であった。

それは佐賀城下を、筑後川と有明海の影響のもとに直接結びつける江湖である。それは佐賀市蒲田津で城原川を合わせることによって、全面的に城原川の排水まで負担する江湖である。佐賀江の排水範囲は極めて大きい。それなのに、筑後川、有明海の影響で、洪水時は引き潮のときしか排水できない。

それに本来は中地江を通じて排水されるはずのものが、中地江が満潮の影響で排水できない間は、佐賀江湖沿いの下巨勢郷、現在の巨勢町の江湖沿いの村々のクリークに放流される。

そこで巨勢下郷のクリークは、市ノ江水路の末端であるために、南川副や東与賀のクリークが貯溜を目的として深く大きいのと同じ理由で大きい。また、上から悪水を持ちこまれるが、その悪水が、思うように引き落せないといったことから、洪水の貯溜を目的にして、大きくしてある。それだけでは足りない。道路もまた洪水の流れを妨げないために、田面より低い野越としている。堀を横ぎる堰堤も、底樋だけでなく上樋をつけるか、または野越にして低くしている。巨勢郷の佐賀江沿いの部落には、洪水流下のため東西新堀川を掘った。

一方巨勢川東岸に排き出すため、鬼丸樋管、城之元の野越をつくった。そういう下流への悪水のシワ寄せを緩和するために、巨勢上郷と下郷との間の主排水路については、ごく簡単な排水協定がある。たとえば記念堀がそうである。稗蒔井樋は、夏場は、底樋を閉じ、上樋の野越からの溢流だけを許す。東西新堀川は、その名まえの通り東西部落の東を流れながら、東西の用水には役だたない。ただ上流巨勢郷一たいの悪水をうけて、これを佐賀江湖に注ぐものであるから、最下流の東西村からは人夫を出さない。

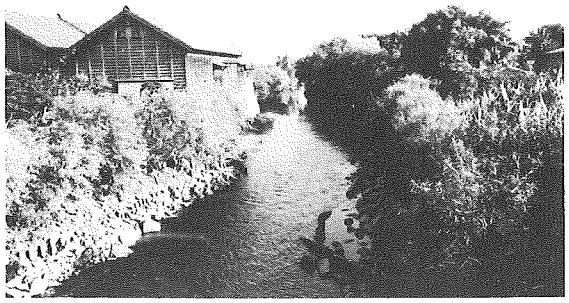
そういうわけで、巨勢郷を東西につっきる長崎街道（国道二六四号線）さえ、田面より低くした野越とした。野越となっている道路は、ごくわずかの雨でも水に洗われるのであった。平水より一尺（約三〇㌢）ぐらい多い小洪水でも減水までに二日一夜、一尺四、五寸（約四〇㌢）以上の洪水となれば三日二夜以上の浸水であった。

たとえ、平野全体で洪水をうけとめる仕組とはいえ、村の真ん中には巨勢川という排水河川を持ち、南は佐賀江湖につながりながら、巨勢郷一帯は災害常襲地帯であった。

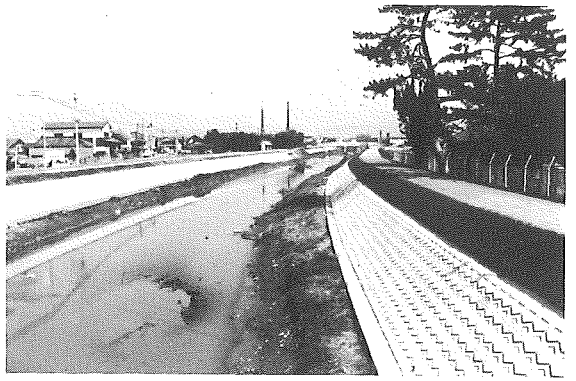
この洪水対策として、八田江湖の上流部に佐賀江湖の枝吉水門を結ぶ水路が、人工的に昭和九年に掘られた。これは佐賀江湖の排水能力が弱いため、あふれる余水を八田江湖の方に流すためにつくられたものである。また河口には潮の逆流を防ぐために、蒲田津水門がつくられている。

次に農業水利については、佐賀江湖筋に大堂吸水樋、中地江を受けて西土井吸水樋、小曲吸水樋・陣の内吸水樋など、多くの吸水樋があり、これによって、農業用水を取水している。新川については後述するが、尾の島井樋はその先端にあり、灌漑水路のほか洪水の放水路の役割をもち、また、川副地区へ農業用水を送水する役割も合わせもっていた。

なお、本町には直接関係はないが、関連があるので、八田江湖についても簡略にふれておく。八田江湖は佐賀江湖の枝吉水門から有明海まで、全長八、一八〇㍍の感潮河川である。佐賀市内を流れる多布施川の本流はこの江湖に入るが、これはあくまでも排水をめざしたものである。農業用水として用いるものは、合流点に水門を設け、下流部の水田には、



佐賀江湖に注ぐ中地江



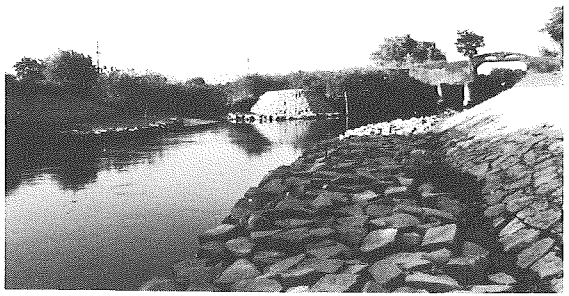
八田橋付近の八田江湖

ここから両翼に掘った小川を利用していた。現在では西岸から東岸へ用水を通すため六つのサイホンが八田江湖の下を横断している。

八田江湖の上流に、佐賀江湖の枝吉水門がある。この水門までの川は、昭和九年、八田江湖改修のとき人工で掘られたものである。このとき河床二㍍のところから、多くの牡蛎殻などが発見され、ここがかつての有明海の海底であったことがはっきり立証された。しかし、八田江下流民にとっては、大雨のたびに枝吉水門を開かれては、下流部が洪水になるとして、水門開閉の管理権を主張、上流部と下流部が対立することがあった。この水門の管理は長年地元の北川副町が握っていたが、昭和四十二年から佐賀県が管理することになった。中流から河口部にかけ、河川改修が進行中で、屈曲部をカットして直線化し、護岸のコンクリートが進んでいる。広江には防潮のための八丁水門が設けられ、その上、三〇㌧の排水ポンプ場をおく事業が進められている。

3　新川と水利機能

新川は佐賀江湖と早津江川を結ぶ延長四、〇〇〇㍍の感潮河川である。この川はもともと江湖であったものを、近世初頭、成富兵庫の手によって中間放水路として改修が行われたと伝えられている。昭和十四年刊の『東川副村誌』に「新川の小杭、野町境あたりは、大江湖と云い、野町付近は小江湖といい、更に小江湖の土橋から早津江間を新川と通称しているところからみれば、茂安の開さくにかかる部分は、小江湖の土橋から早津江川に至る間にして、その上流は改修したのみにあらずやと思われる。」とみえる。



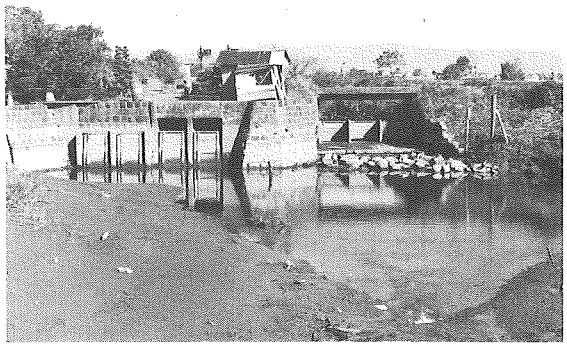
佐賀江湖のカンスの弦付近

新川は佐賀江湖（以下佐賀江と略す）の排水のほか、農業用水として、アオをとり入れる役割りもあった。淡水を利用しない上流部からみれば、江湖は排水河川であるか、舟運に役立つだけであるが、淡水の恩恵に浴している南部地帯にとっては用水河川でもある。

佐賀江と新川を結ぶ樋門が、「尾ノ島、三丁井樋」であり、新川と早津江川を結ぶのが「神明井樋」である。本来の用水機能にあわせて、上流部の排水路のはたらきを与えられたのであるから、これらの樋管の設置維持管理の費用は、藩政時代から、上流の巨勢、淵、大財、春日、金立、高木瀬、神野各村々が負担した。

佐賀江の排水機能が十分でない根本の原因は、佐賀江が筑後川に落ちる江湖であるからである。ところで佐賀江の補助放水路とされる新川は、佐賀江と同じように、筑後川に落ちる江湖である。いくらかの時間のずれはあるが、佐賀江で排水できないときは、新川でも排水できない。

そうであれば、この補助排水路の意味は、極めて弱い。とすれば、この新川でカットできない佐賀江の洪水を、新川が開放できない間、佐賀



三丁井樋付近

江そのもので受けとめなければならない。そのために、佐賀江に極端な人工的蛇行を与え、河道と河積を二・五倍以上にふくらませることである。つまり、ここは、極めて豊かな穀倉地帯であるから、田面を遊水地とすることができないので、河道に曲がりを与えることによって、佐賀江そのものを遊水地とする考え方である。

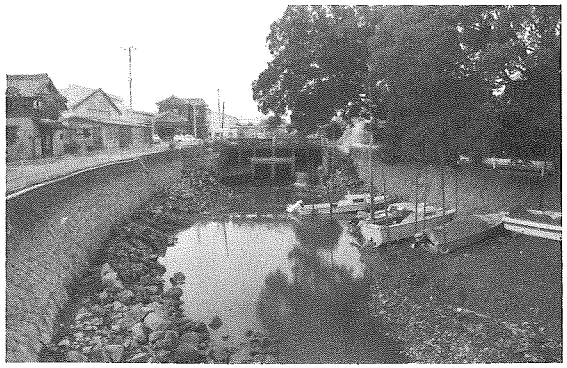
その上、新川の分岐点であるカンスの弦（別写真）から下流には、城原川水系西岸の悪水が流れこむ。横落水路の末流である小松川の流末、犬童川から中地江、千速濠―中地江（高田土地改良区）お茶屋井樋―中地江（余り江水利組合）などである。こうして、カンスのツルにはじまり、小曲、大曲という佐賀江の蛇行がつくられたのである。このような形で、佐賀江と筑後川とのからみ合いの上で、佐賀江の水、つまり今日の多布施川以東、佐賀江以北、城原川以西の悪水排除の仕くみが考えられた。

佐賀江は、もともと海岸線沿いに流れる澪から発達した江湖である。それは佐賀江以北の排水を主たる役割とする。従って川の流れは東西になっているけれども、ふつうの川のように両岸に堤防をおく必要はない。ただ南岸に堤防をおいて、佐賀江以北の洪水が川副地区に浸入するのを防げばよかった。逆に言えば、北岸に堤防をおくことは、かえって洪水の自然の流れを妨げるものであった。従って、北岸には堤防の必要がなかった。北岸の立場から言えば、南岸の堤防さえ、邪魔になるものであった。そこで佐賀江南岸の堤防については、南北間の利

害を反映した極めて厳重な旧慣があった。

① 堤防の高さは、巨勢川高尾橋横の藩の米穀倉庫の床板より五寸低くした。それ以上の洪水の場合は、この堤防を乗りこして川副地区に溢流する。堤防には、笹を植えた。堤頂まで笹を植えた堤防は、洪水のときも、その上に土俵をおいて提防を高めることができない。

② 佐賀江と巨勢川合流点から、犬尾橋までの間は、堤防外に遊水地をおいた。



神明井樋付近

③ 犬尾橋から下流では、新川による洪水カットと蛇行による洪水の貯溜、流路の延長によって、佐賀江湖そのものを遊水池とした。新川によってカットできない新川分岐点以上の洪水と、中地江をはじめとする城原川西岸から分派した悪水とを貯溜しながら、筑後川におもむろに吐き出すのであった。そこで犬尾橋下流では堤防外の遊水地は必要がなかった。

④ 佐賀江の補助排水路の分岐点をどこにおくか。新川と同じように、澪筋から発達した佐賀江につながる江湖は、いくつもあった。また早津江川につながる小さな江湖もいくつもあった。そこうちのどの江湖とどの江湖を結びつけて佐賀江の放水路とするか、それが新川開さくとなった。

⑤ 新川の排水は佐賀江以北のためのものであった。そこで、新川の排水機能を強化するために、佐賀江筋および巨勢川筋を新川の尾ノ島樋門まで漲えるのが、上流村々の役割であった。

この川漾えには、同じ佐賀江北岸の最下流東西村は参加しない。巨勢郷の南端に位置し、巨勢郷一たいだけでなく一部横落水路、焼原川等の内水をその地区内の樋管、戸立から佐賀江に排除しなければならない東西村としては、佐賀江上流の漾掃によって、佐賀江の洪水の流下の時間と速度が早くなることは迷惑であった。

⑥ 東西村、あるいは巨勢郷南部から見た尾ノ島樋門の役割は、洪水時に巨勢郷の内水排除にあたる東西村一たいのクリークが、佐賀江の背水の影響を受けないようにすることであった。そこで、巨勢川および佐賀江に対し上流村々の漾掃を認める一方では、巨勢川の高尾橋以南には蛇行と遊水地的な入江とをおいて、洪水流下の速度をセーブしている。

⑦ 洪水時の尾ノ島戸立の開放は、東西村の相談により、これを管理している山津村が開ける。尾ノ島戸立および神明井樋の維持管理については、巨勢郷の上流になるほど負担が重かった。

⑧ このように、新川の事業は市ノ江川、小寺川などを中心にした佐賀江上流の排水秩序と、筑後川の背水とのバランスをとって、佐賀江の洪水負担能力をカバーするためのものが、カンスのつる以下の蛇行であり、新川の改修であった。それは当然、佐賀江をめぐる南北の利害の対立となった。

⑨ 佐賀江をめぐる南北の対立は、佐賀江南岸の堤防の高さ、堤防修築については北岸の同意を必要とすること、新川樋管開閉については、南岸川副郷の管理にあること、経費負担は北岸に属すること。ただし南岸の立場からは佐賀江はあお取入の用水源であるために、北岸からみた排水樋管は同時に用水樋門でもある。そのため南岸は用水樋門として、これの維持管理に当たることが決められている。

⑩ その後干拓の進行につれて、川副地区はアオへの依存を強くしていった。特に新川から早津江川への排出

口である寺井の神明井樋からも取水するということになると、旧来からの新川の排水機能を再確認し、慣行を成文化する必要が生まれた。昭和二十八年県営巨勢川沿岸排水改良工事が竣工し樋管が拡大強化されたのを機会に、用水側である川副土地改良区と排水側である旧佐賀市、および上佐賀下郷、巨勢郷(巨勢、兵庫、高木瀬、金立、春日)との間に排水に関する協定が決められた。

4 クリークの機能

佐賀平野では貯水溝渠(こうきょ)をクリークと呼んでいる。中国南部に多く分布するよどんだ堀をクリークと称するところから、日中戦争以後、佐賀でも堀をクリークと呼ぶ人が多くなった。

有明海の後退にともなって、沖積平野が沖に延びていくと、川は水を供給する度合いを増すことになり、自然の水路と人工の水路を合わせて、川の流量を平野全体に広げる必要があった。そのためには水の反覆利用をはかるための貯水池がいる。流れ堀は導水路となり、溜池ともなった。

諸富町は農業地帯であるので、水を溜めるためのクリークの密度は高い。また、筑後川、城原川、新川はクリークからの排水路とつながっている。これらの堀は有明海の干潮時しか排水できないために、悪水を貯溜する意味からもクリークの密度が大きくなる。また満潮時にアオを引き入れる上でもその貯溜能力を大きくさせる必要があった。クリークの成因については自然発生的なものと人為的なものにわかれるが、分類すると次の四つに分けることができる。

(1) 自然発生的クリーク

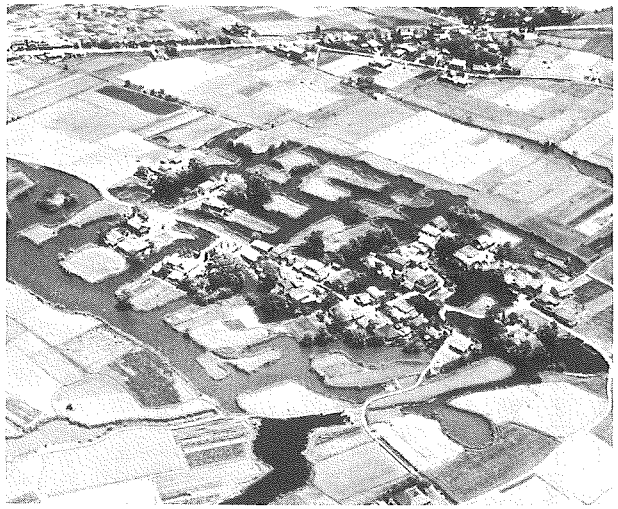
佐賀平野のクリークの分布は、海抜五㍍線以下に限られており、その大半は有明海の感潮区域であり、有明海の陸化に伴って、干潟にあった澪筋が江潮として残っており、潮の満ちひきによって、平野の奥までアオを運んでくる。諸富町の農業用水はこれまで、佐賀江湖や新川のアオに負うところが多かった。特に干ばつになれば諸富南部地区などはアオに頼るほかはなかった。アオは早津江川や城原川を逆流して佐賀江湖に入ってくる。大昔は干潟に多くの江湖があり、この地域に住みついた原住民は、このアオを水源として水稲栽培をはじめたと考えられる。しかし、アオは常に一定して流入するわけでなく、また終日満潮を保っているものでもない。したがって流入したアオを広範囲に導入し、貯水する溝渠が必要となる。ここにおいて、導水→貯水→灌漑の関係をもつ用水堀を掘さくする必要が生まれる。この場合旧河道なども導水路に利用されたものとみられる。

(2) 条里制時代のクリーク

大化改新（六四五）の事業として実施された条里制の遺構とみられるクリークのなごりが本町にいくつかみられる。諸富は開発が新しいため、はっきりした形では残っていない。坪名は山領に隣接する佐賀市北川副町角町に残っているので、条里制が町の北部は実施されたことは間違いない。

(3) 中世のクリーク

平安時代になると、貴族や豪族が土地や村を私有する荘園が各地にでき、その所有者が勝手に低湿地などを開拓した。当時の原野、荒地、湿地などを空閑、古賀、牟田など呼び、本町の小杭・三重なども鎌倉時代の開拓である。



環濠集落（神埼町横武付近）

当時の土豪は、その勢力範囲の土地の真ん中に館や城郭を構え、周囲に濠をめぐらして防御を強めた。また戦乱に備えて、村全体をクリークで囲み、外敵の侵入を防いだ。環濠集落というのがこれで、本町内の集落でも、このなごりを残すところがみられる。環濠集落の典型的なものは、神埼町横武や千代田町詫田付近で、いまでもその遺構がはっきり残っている。

(4) 近世のクリーク

戦国時代各地の土豪は、龍造寺氏によって統合され、その勢力はやがて鍋島氏に受け継がれた。

佐賀藩祖鍋島直茂は慶長十三年（一六〇八）から、現在の佐賀の位置に城を造り、城下町の建設を行った。城下町の軍防と生活用水、周辺農村の灌漑用水に対する考慮が必要であった。成富兵庫は直茂の武将として、治水を担当した。兵庫は佐賀藩の領国経営として、一つのまとまった計画によって、長年の戦乱によって荒廃した耕地に、新しい水体系を加えて、堤防のかさ上げや、それにともなう井樋、せきの増改修などを行った。

佐賀城下の排水を八田江に落すようにしたのも彼の計画で、佐賀平野の水体系は、藩政時代はもとより、明治以降

もほとんど動いていない。戦後、北山ダム事業によって、市ノ江―川副幹線ができたこと。干拓地の地下水利用、木造樋管が石造あるいはコンクリート化されたこと。クリークからの揚水が、人力から機械に代わったくらいである。

(5) 三つの水源とクリークの役割

諸富地区の水利構造は複雑である。水源となる脊振山地より流れる中小河川は、天井川であるので、用水として運びこまれた水は、元の川に帰ることはできない。したがって使命の終わった余水は、平野の低い切りこみを求めて集まる。この切りこみは江湖から澪につながり、有明海に入る過程をとる。だから江湖は満潮になれば逆流するので、その影響を断ち切るために樋管や堰がつくられている。

次に筑後川の本流は、平野の一番低い所を流れているから、この水を支川に引き込むことはむつかしい。ところが、人工的に筑後川の水を堰き上げることはできても、有明海の逆潮は好まずして筑後川の水位を堰き上げ、一度は有明海に流れ下ったはずが、潮に乗って筑後川をさかのぼり、また江湖を伝わって、平野の隅々まで、筑後川本流の水を運んでくれる。この潮の上に乗った真水がアオである。したがってアオは本流の形をかえた用水利用の形式である。

こうして有明海→筑後川→支川（江湖）→クリークという形で取り入れられた水は、そのまま放っておけば引き潮と一緒に海に落ちてしまうので、堰と樋門が必要になり、この樋門が水位を調節している。

水利構造を図示すると上のようになる。

川→幹線水路→流れ堀→クリーク⇄付属排水施設
↑↓
（実線は山水の流れ 点線は逆潮の流れ）有明海⇄筑後川⇄江湖

広大な佐賀平野に水を供給するには、流水をおもむろに流しながら、これを繰り返し利用する必要があり、水不足地帯では、これをつとめて、さっと流してしまわないためにも溜めておく容器が必要である。それが導水路にあたる流れ堀であり、同時に溜め池となるクリークとなっている。したがって上流からの水源が十分であるならば、クリークは流れ堀とその補助をする枝川だけで足りるはずである。クリークが縦横に発達しているのは、水源に不足していることを示し、水を有機的に働かすために掘削されたのである。また一つには満潮時、江湖へ排水ができないとき、内水の貯溜的意味も合わせ持っている。

なお、クリークの利用可能水量を佐賀平野部のみ表6にしてみた。（『九州農政局筑後川水利（一九七二）国営筑後川下流地区土地改良事業計画書No.3』より引用）

表6　クリーク利用可能水量

（単位：千m³）

市町村名	クリーク総貯水量	クリーク利用可能水量
北茂安町	240	94
三根町	1,030	487
上峰村	366	173
神埼町	1,445	776
千代田町	3,187	1,416
三田川町	314	150
川副町	1,970	405
諸富町	729	287
佐賀市	6,214	2,453
東与賀町	613	126
久保田町	852	308
大和町	38	8
小城町	87	30
三日月町	707	398
牛津町	677	265
芦刈町	1,170	465
計	18,639	7,841

(6) アオ取水の構造

有明海は干満の差が大きく、大潮のときは五メートルを超える。アオ利用地域は満潮位以下の低平地であるので、この干満を利用し、逆潮にせき上げられたアオをクリークに引き入れ農業用水として使用する。アオ取水の施設としては、樋管によるものとポンプによるもの、また両方組み合わせたものなどある。取水する樋管の構造は、堤

防下に暗渠を設け、クリーク側のスルースゲートの人工開閉により取水する「用水専用型」と河川側に自動扉をクリーク側にスルースゲートをもつ排水管に用水専用型樋管が併設されている「用排水兼用型」の二種が普通であり、稲作の最盛期の七、八、九月の満潮時、日に二回取水している。

ポンプによる取水は小潮期に樋管で取水できないところに、これを補うために設置しているところが多い。ポンプを動かせば取水は可能だが、諸富地区の場合、塩水をくみ取る恐れもある。

塩分が多いアオは白い泡ができるので、これを判断するにも、長年の経験と勘を必要とする。

昔は井樋番がヒシャクを竹竿につけたもので水をくみ、口で味合って塩分を調べていた。井樋番の舌は塩分検定器より正確で早かったといわれた。

佐賀平野のアオ取水利用面積は表7(『九州農政局資料』No.16による)のとおりで、本町の場合は、アオ依存度が一五%程度であることがわかる。

図10　アオができる状況図

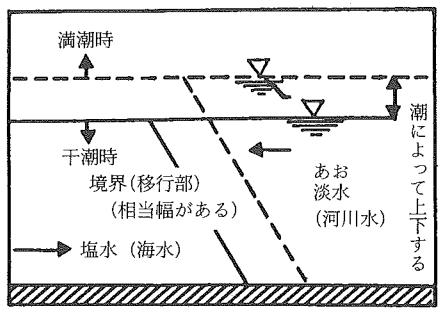


表7　アオ取水利用の面積

(単位：ha、%)

ブロック / 地帯 / 市町村名	佐賀東部下流部 アオ地帯	嘉瀬川左岸下流部 アオ地帯
佐賀市	205.1(4.3)	320.8(8.9)
諸富町	452.9(9.4)	177.0(4.9)
川副町	465.1(9.7)	2,219.4(61.2)
東与賀町		905.8(25.0)
神埼町	255.2(5.3)	
千代田町	1,738.2(36.2)	
三田川町	80.0(1.7)	
北茂安町	343.7(7.2)	
三根町	945.2(19.7)	
上峰村	312.5(6.5)	
計	4,797.9(100)	3,623.0(100)

5　諸富町の用排水

石塚の渡端に、享保十七年(一七二六)の大飢饉(子年の飢饉)で亡くなった難民の供養碑(千人塚)がある。早ばつのあとのいなごの発生で、鯨油その他の油での駆除も及ばなかった。諸富は、港で人と物の集まるところ藩米の移出港であるが、この年には逆に幕府の救援米が移入されたところであった。千人塚は救援米の到着や粥の焚出しの甲斐もなく飢に倒れた人たち、しかも、佐賀では米が値上がりして、一般の物価が下落し、領内の珍宝、衣類や社寺の鐘その他の盗品を買いあさり、肥後、筑後、島原に運び去られたことをいたむものであった。

佐賀江湖と筑後川の堤防で守られた諸富は、佐賀平野では、舟運、用水、排水の上で一番恵まれた土地である。それでも日照りが続けば、筑後川の水位が下がり、塩分濃度が高くなって、アオの水質が悪くなる。昭和五十三年と五十七年の渇水では、松原、下筌ダムの緊急放流で、大中島、大野島、大詫間は田植水の危機を乗りこえた。五十三年渇水は、未曽有のものであり、福岡市の上水は十ヵ月余りに及ぶ給水制限を余儀なくされた。福岡市は、諸富町の上水道と味の素工場の給水源である佐賀東部工業用水道と両筑平野用水の水がめである寺内ダムからの補水で、辛じて難を免れた。

諸富町は、三・五メートル以下の低平地であるので内水排除に苦しむ。佐賀江湖、筑後川ともに感潮河川であるために、内水より外水(川の水)が高い。ガタのために排水樋管の出口がふさがれる。堤防によって水の出口がない。都市化の進行と農民の兼業化によって、農民及び土地改良区、農村部落の変化のため、村落はむかしのような用排水路であるクリークの維持管理能力を失ったために、クリークの断面が狭小化していく。道路、鉄道によって

流水が阻害される。味の素九州工場、大川木工の進出等による商工業化の進行、川沿いは津部落であること等によって、本来低平地としての内水排除に苦しむ土地柄である悪条件をさらに悪化させるに至った。そこで新川、佐賀江湖、筑後川の排水樋管の抜本的な改修、改善、排水幹線クリークを準用河川に指定し、更に都市下水路の指定によって内水排除問題を解決することにし、準用河川の告示（昭和四十九年一月四日諸富町告示第一号）を行った。佐賀江（蒲田津樋門以下）及び筑後川（早津江川）の排水樋管は、建設省の筑後川改修による直轄改修が行われ、管理は地元に委託されるに至った。

諸富町のクリークは、①大中島地区②三丁分地区③新川以東地区④新川以西地区でその性格と役割を異にする。

大中島は、筑後川の中洲である。それは慶長から、元禄の間に出現した中洲である。そのためクリークは、中洲形成時の澪を原型とする極めて整形なものであった。昭和二十八年災害以後の筑後川の河川改修で堤防の完成をきっかけに、昭和三十二年、諸富町としては最初の土地改良事業を行い、整然とした集落と耕地、クリークを完備し、島の北端に筑後川からの用水ポンプをおき、メインの水路として中の島川がある。三丁分地区は、本来徳富と陸続きであったが、佐賀江湖の出口をつけかえたことで、舟渡し（作渡し）による耕作を続けてきたが、三川橋の完成（昭和二十九年）によって、諸富との陸続きとなった。メインの水路を三丁分川という。これは本来徳富川と連続する水路であった。ここに諸富町の塵芥処理場がある。

大中島の土地改良事業と併行して、諸富町営上水道（昭和三十二年認可、三十三年起工、三十五年竣工）が揚水ポンプを併用する形ではじめられた。上水道は順調な発展をみせ、大川市道海島にも分水するに至ったが、筑後川のアオの塩分濃度の悪化により、県営工業用水道からの分水受入れのため、大堂に浄水場を設置した。（昭和

四十九年起工、五十一年八月竣工）今後の用水源手当としては、筑後大堰から取水する佐賀東部広域上水道への参加を予定し、負担金を支払中である。

新川東部地区は、佐賀江湖の用水樋管及び用水ポンプを水源とする完全なアオ用水地域で嘉瀬川水系とは、完全に独立した用水区域である。

小曲樋管を水源とする小曲川用排水区（陣の内、加与丁）と西土井の大堂ポンプを主水源とする松の木川、太田川、徳富川、小杭川、大五川、諸富中央都市下水路（本線、支川）をメインの水路としている。

新川以西のクリークは、新川を水源とするアオ地帯であるが、北川副、中川副のクリークと接続するクリーク地帯であり、北山ダム（嘉瀬川用水圏）の末流多布施川と微妙なつながりを持つ地帯である。特に船橋から西川副小学校に至る東西のクリーク（旧川副南郷と北郷の境界）によって、川副地区の、干拓の進行と深いかかわりを持つ地域である。かつては川副土地改良区（川副水利組合）の主要構成地区であった。

佐賀江湖（中地江、城原川を含む）及び新川は、筑後川右岸地区最大のアオの供給源であり、多布施川水系末流（川副地区）の用水不足をカバーするものである。

① 大正十一年佐賀郡長早田辰次は、東与賀地区の干拓地の用水補給のため、多布施川分流天祐寺川の取水を増し、多布施川本流の水量をけずった。代わりに北川副村江上の佐賀江樋管に百馬力のポンプを置いた。ここは、もともと佐賀江の旧河道（ミオ筋）であり、このクリークの両岸は高水敷（下り田、河成田）が続いている。だがガタのためポンプはその機能を発揮できなかった。

② 昭和七年からの八田江改修、枝吉樋門によって、八田江を枝吉樋門につないだことで、枝吉樋門から八田

江の間を七本の多布施川末流が川副地区に流れているが、八田江によって、絶ち切られサイフォンでつながることになった。川副地区（川副水利組合）は、サイフォンはつまり、川副地区の水を奪われると反対したが、押しきられた。

③　川副地区の反対が、微弱であったからである。川副地区が、多布施川の分水減小に対処するため、昭和四年の旱魃の経験から、大溝川の大井手に佐賀江をくぐるサイフォンを昭和六年に設けていたからである。佐賀江をくぐるサイフォンは、その威力を発輝し、さらに第二サイフォンがつくられた。

④　八田江湖をくぐるサイフォンは、安住川一本を除き、すべて川副地区の予想通り目づまりしてしまった。裏十間川をはじめ、多布施川末流の佐賀市内クリークの川干に参加していた川副地区民（裏十間川は、新北村、東川副村、大詫間村の公役であった。）は、川干に加わらなくなった。第二次世界大戦中の人手不足もあって、本庄、東与賀地区農民も佐賀市内のクリークの川干から脱けていった。

⑤　貫通道路、佐嘉神社、神苑用地等として、佐賀の東の城濠は埋められていく。十間川も裏十間川も埋められて川幅をせまくしていった。こうして、佐賀市内のクリーク及び城濠の持つ遊水機能が失われた。さらに、多布施川末流が、目づまりしたことで、佐賀市水ヶ江、本庄村、北川副大崎、安住、東与賀村北東部、横小路、鷹匠小路の排水が悪くなり、城内二の丸付近に滞水をみることになった。

⑥　川副地区の用水を補うための佐賀江湖の下をくぐるサイフォンは、洪水時も流入し、北川副地区の排水問題を加重した。

⑦　八田江湖には、計画通り、裏十間川以東、巨勢川以西、市ノ江川以南の春日、兵庫、高木瀬、大財、巨勢、

旧佐賀市の排水が流れこむことになった。この八田江の水位に押されて、八田から立野、南里間（元佐賀市長横尾敬義宅横の樋管から古江湖樋間）の本庄、北川副、東与賀、西川副の八田江湖への排水樋管は、一部逆流するようになった。

⑧　一方本床の大井樋（南部バイパス北）によって古江湖川と結び、中島を経て東与賀に通ずる幹線クリーク（善左衛門水路）は、本庄村に大正九年旧制佐高（現佐大）が創立され、都市化の進行と東与賀県道によって水路断面が縮小され、佐賀大学付近から精町にかけて浸水するに至った。

⑨　大覚寺井樋水路は、旧制佐高西の十五川となり、飯盛樋管からドンポ井樋を経て本庄江に、南に進むものは、戊申水路となり戊申樋管から有明海に抜ける。戊申水路は、有明のガタにふさがれていること。ドンポ井樋は、本庄江の水勢に押されるために、ともに排水能力に欠けることから、東与賀地区が飯盛樋管の改良を許さない。

⑩　本庄江は、天祐寺川以西の佐賀市八戸町、鍋島、嘉瀬、本庄、西与賀の排水で手一杯である。そこで昭和二十六年本庄江改修促進協議会を設け、三十四年本庄江沿岸排水土地改良区を設立（関係市町佐賀市、東与賀町）昭和四十五年に工事を完了解散した。

⑪　こうしたなかで、佐賀江及び新川に対し、アオ補給への期待及び排水機能への期待が大きくなっていった。

⑫　それというのも、八田江、本庄江の事業は、農林事業としての限界があったこと。八田宿、今町、舟津、広江（以上八田江）、今津、厘外、相応（以上本庄江）という巨大な津部落がはりついていることのために、断面の拡大が期待できないこと。

昭和二十八年の大災害以後、筑後川水系には抜本的な手が加えられ、さらに昭和三十四年の海岸法の施行以来有明海岸は指定海岸となり、根本的な海岸事業が行われたこと。

⑬ 筑後川のアオの水質悪化の傾向がどんどん進んでおり、夜明ダム、松原・下筌ダム、江川・寺内ダム等上流ダム群の完成、さらに筑後川下流河道の掘さくがこの傾向を強めたこと。

⑭ 佐賀江湖の堤防は、戦後三回（昭和二十二年、二十四年、二十八年）にわたって破堤していること。

⑮ 諸富町内で都市下水、及び準用河川を指定し、内水排除を必至とした都市化の傾向は、佐賀江湖及び巨勢川、黒川上流（佐賀郡大和町尼寺、佐賀市高木瀬町、兵庫町大財町）の急激な都市化を促し、降水の流出量及び流出の速度を早めたこと。そのため佐賀江及び巨勢川は、その洪水負担能力の限度に来ていること。

佐賀江湖の蒲田津樋門

⑯ 筑後川が水資源開発促進法による指定水系となったことで、これまで困難とされていたクリーク地帯の大規模土地改良事業、筑後川下流土地改良事業の水源手当（アオに替わる水源）が、筑後大堰事業とセットすることで可能になったこと。佐賀江の断面を拡大しても、アオに替わる水源が確保されるならば、これまで嘉瀬川水系の用水不足（川副地区の用水不足）をカバーしてきた佐賀江の機能（アオ取水）が失われても支障ないこと。

⑰ 佐賀江湖と巨勢川合流点に、佐賀市衛生処理場が立地したことで、佐賀江は排水河川としての色彩を強めていること。

⑱ 既に蒲田津には逆流止水門が完成しており、容易に排水ポンプをセットできること。

⑲ 佐賀平野全面にわたり地盤沈下現象が出ていること。

⑳ 昭和四十七年豪雨により、従来の遊水地佐賀市金立、久保泉、神埼町西郷地区はもとよりとして巨勢川右岸堤防が破堤し、佐賀市が水浸しになったこと。これをきっかけに、山麓とクリーク地帯の境界線に、流況調整河川と洪水調整池（建設省佐賀導水事業）をおき、巨勢川、城原川上流で洪水をカットし、佐賀江、新川、中地江、八田江に手をいれ、特に佐賀江の河道断面を拡張し、蛇行をショートカットし、蒲田津、寺井、八田江湖八丁井樋、城原川日出来に排水ポンプをおく計画である。さらに脊振山地で城原川、嘉瀬川の洪水をカットする城原ダム、嘉瀬川ダム（いずれも多目的ダム）が側面からこの計画を助けるという構想が出された。

㉑ 昭和五十四年、五十五年と豪雨が続き、二年連続の内水氾濫となり、牛津川では破堤による災害となった。佐賀江湖地区と六角川地区（武雄、白石、北方、大町、牛津、福富、小城）は、激甚災害復旧事業の指定をうけ、五十年確率を目標とする改修計画が進行中で、県は、佐賀河川改修事務所を設け、激特事業が進行中である。この事業によって、佐賀江は完全に直線化された江湖となり、蓮池公園は人工河川によって両断されることになる。

㉒ なお、筑後川下流土地改良事業によって、四本の幹線水路（徳富線、大詫間線、諸富線、徳永線）が佐賀江をサイフォンで横断して川副地区に通ずることになり、これが、佐賀江のアオ用水機能に代わることになっている。

両事業とも既に実施段階に入っている事業であるので、コメントは避けたいが、土地の実情と水の本質にマッチした事業であること、過渡的な経過措置[注]を誤らないこと。アフタケアを考えること。維持管理に手落がないこと。計画相互の調整を誤らないことを願って止まない。

水問題の処理に当たっては、広域的展望と、長期的展望と現実への対応を誤らないことが基本の課題となろう。

注　佐賀江改修の過渡的措置については、諸富町当局と佐賀県との間にアオを補償せよとの覚書が作成されている。さし当たりの対策としては、蒲田津樋門操作により佐賀江湖を用水補給と蓮池公園対策、放水路の維持管理対策の一石三鳥策として、佐賀江湖を運河化し、舟を走らせることである。そのことにより蓮池公園は、クリーク公園として再生できるのではなかろうか。それはまた、舟運、用水、排水三つの役割を荷わされ、嘉瀬川水系と筑後川水系を結ぶ流量調整河川として佐賀城下町の形成、干拓の進行に対して、侍女の如く、貞女の如く奉仕してきた佐賀江湖に報いる道であろう。これからの河川事業や土地改良事業には、そのような夢も必要ではなかろうか。諸富から今宿まで、新川の神明井樋から、三丁井樋～佐賀江湖～枝吉樋門～八田江～八田江の八丁井樋と舟が走ることになれば、江湖とクリークをセットした一大水辺公園、水郷地帯が出現するであろう。舟が通ずることになれば、ドロによって水路がつまるということも緩和されるであろう。その場合の護岸対策としては、佐賀江湖のいたるところにみられる伝統的な荒籠の手法に学ぶべきものがあろう。

（本稿については福岡大学教授宮地米蔵氏より、ご教示いただいたことを付記しておく）

佐賀江川をシ

大水害にも対応

佐賀市の排水能力向上

水害に悩む佐賀市の排水能力を高めるために蛇行している佐賀江川をショートカット

佐賀江湖の直線化工事を伝える新聞記事
（昭和59年１月12日　毎日新聞）

(七)　動　植　物

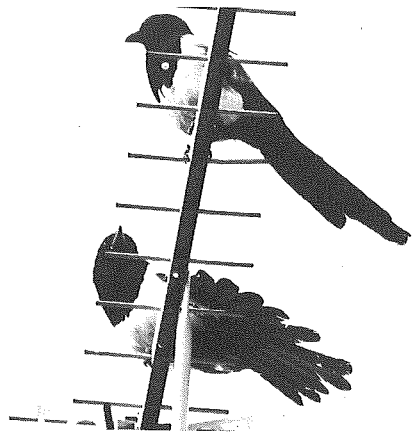
諸富町に生息する動物・植物は多種多様であるが、この地域だけに生存するという特有な生物は少ない。ただ全国でも特異な海として知られている有明海と筑後川の河口に当たるため、特色ある魚介類や水鳥を観察することができる。

しかし、近年は農薬の普及や生活用排水、工業用排水などによる河川や河水の汚染によって、魚介類の環境が変化している。また、干拓事業の進展や護岸工事の工法がかわり、堤防などコンクリート化され、昔のような葦（あし）の茂った土堤のようなものも少なくなったので、小蟹や水鳥の産卵場所も少なくなり、圃場整備などでクリークも規格化され、すっかり景観や環境も変わって、次第にその姿を消そうとしている。

1　動　物

本町に生息している哺乳動物は、家畜を除くとごくまれで、イタチ、モグラ、コウモリくらいで、戦前まではイタチが鶏を襲った話や、野狐がいたとか、夏にはコウモリが家近くまで飛んでいたといわれるが、現在ではほとんどみることはできない。

鳥類ではスズメ、ハト、カラス、カケス、ヒヨドリ、ホホジロ、モズ、メジロ、ウソ、セキレイなどが営巣する。この中で特徴のあるのはカササギで、本町にもいたるところに営巣しており、国の天然記念物に指定されて



天然記念物指定のカササギ

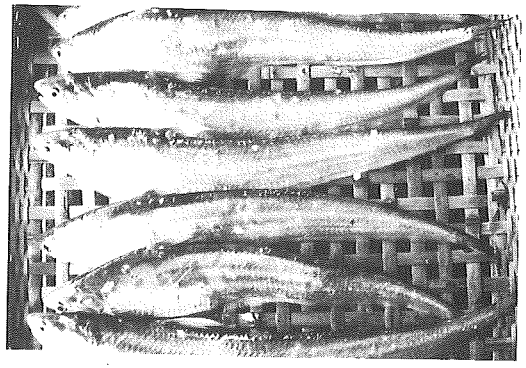
いる。

渡り鳥には夏鳥と冬鳥とがいるが、夏鳥にはツバメ、ヨシキリ、バン、シラサギ、ゴイサギなどが南方から渡ってくる。もっともサギ類の中にはゴイサギのように留鳥になって一年中いるものもいる。冬鳥ではカモが非常に多く、ガン、オシドリ、シギなどが有明海の干潟で遊ぶ姿がみられる。小鳥ではツグミやタヒバリ、アトリ、背中に小紋をつけたジョウビタキなどが北方からやってくる。この中でめずらしいのはツクシガモ、トモエガモ、アカツクシガモなどといわれている。

爬虫類ではアオダイショウ、シマヘビのほか、毒をもつマムシもおり、昔は被害者がよくでた。トカゲ類では、トカゲ、カナヘビが多い。また方言でクーヅと呼ばれている石亀やスッポンもたまにみかける。

両生類では、トノサマガエル、ヒキガエル、ツチガエル、樹上にもはいあがるアマガエルも多い。近年は食用ガエルのウシガエルが繁殖し、夜、大声で鳴くので、安眠を妨げるところもでてきている。

魚介類は海水産と淡水産に分かれる。海水産は有明海のもので、魚類ではハシクイ、エツなどは、この地方独特なもので、エツ漁の季節になると多くの観光客が訪れている。このほかボラ、スズキ(ハクラ)、ヤマノカミなどの魚が筑後川をのぼってくる。淡水産のものは、フナ、コイ、ハヤ、ナマズ、ウナギ、ライギョなどがいる。



筑後川の名物のエツ

近年ライギョが多く繁殖し、他の川魚の稚魚を捕食して、川魚のギャングとしてきらわれている。フナは戦前まではマブナで、みみずでよく釣れていたが、近年はヘラブナが多くなり、植物性の餌でないとよく釣れなくなっている。

貝類は有明海でカキが戦前まで養殖され、中国まで輸出された時代もあったが、戦後は海苔養殖がこれにかわっている。カキ殻は本町のいたるところで出土しており、古くから生息していたことがわかる。貝類での珍種はメカジャ、学名をシャミセン貝という。化石時代からの動物で、ものすごい繁殖力をもち、古くは食料のほか肥料にまで使われていたが、農薬の影響で、その数が少なくなっている。このほかウミタケ、アゲマキ、ハイガイなどがいる。

エビ・カニ類も種類が多く、エビ類二九種、ヤドカリ類一三種、カニ類九六種、その中でよく知られシオマネキは「ガニ漬け」の材料となる。このカニは雄は左右のハサミが大小異なり、大シオマネキ、ヒメシオマネキ、白扇シオマネキの三種がある。通称竹崎ガニの名で知られているガサミは、有明海の沖合いで獲られており、観光客に喜ばれている美味のカニである。シャコも「麦シャッパ」といわれる五月ごろとれるものがうまい。

近年、有明海で急変したのは、カキ養殖にかわって、昭和三十二年ころから海苔養殖が盛んになり、冬期の有明海はノリヒビが林立し、現在では本町を代表する水産物になっている。

2 植　物

植物も佐賀平野部の他地域と特別に変わったものはない。平野部では堀割りが多いため、水生植物が多い。農林省九州農業試験場調査の『クリーク水田地帯における生態解析』によると、水生雑草は一九科、三四種（表8）あり、それらの大部分は抽水雑草であるとしている。

本町で古くから繁茂していたのは、ヨシ、マコモ、ハス、ウキクサ、ヒシ、アゼガヤなどであったが、戦後はホテイアオイが急激にふえ、堀一面を覆うようなこともある。

路傍にはセリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザの春の七草はじめ、ヨメナ、ノビル、ヨモギ、スミレ、タンポポ、レンゲソウ、オオバコ、アザミ、ツユクサ、ススキなどみられる。また薬草ともなるドクダミ、ゲンノショウコ、ヒガンバナなどもみられる。

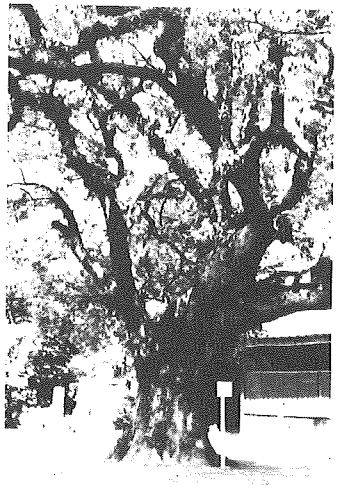
樹木は山地でないため後年植樹したものが多く、常緑樹ではクスノキが多い。佐賀県農林部編の『佐賀の名木古木』（昭和五十一年）には、本町関係の名木古木として表9のものが記載されている。

マツは社寺や旧堤塘に植えられていたが、マツ食い虫の被害などにあって、古木はほとんど枯れてしまった。このほか落葉樹のエノキのほか堀岸のため、柳を植えているところも多い。また江戸時代、佐賀藩の奨励によって木蠟をとるため、ハゼの木を植えさせたが、いまではほとんど残っていない。竹類ではマタケ、カンチク、シノダケなどでモウソウは少ない。果樹は柿、柚（ゆず）、ブシュカンなど自家用に栽培しているもので、とくにとりあげるようなものはない。

表8　クリークに生育する水生雑草の種および科名※

種名	科名	生活形	雑草害※※	種名	科名	生活形	雑草害※※
1 ホテイアオイ	ミズアオイ	浮漂	◎	18 ケイヌビエ	イネ	抽水	△
2 キシュウスズメノヒエ	イネ	抽水※※※	◎	19 タイヌビエ	イネ	抽水	△
3 キシュウスズメノヒエ亜種	イネ	抽水	◎	20 フトイ	カヤツリグサ	抽水	△
4 オオフサモ	アリノトウグサ	抽水	◎	21 クログワイ	カヤツリグサ	抽水	△
5 アシカキ	イネ	抽水	○	22 ガマ	ガマ	抽水	△
6 サヤヌカグサ	イネ	抽水	○	23 オモダカ	オモダカ	抽水	△
7 マコモ	イネ	抽水	○	24 イボクサ	ツユクサ	抽水	△
8 ヨシ	イネ	抽水	○	25 ボタンウキクサ	サトイモ	浮漂	△
9 トチカガミ	トチカガミ	浮葉	○	26 サンショウモ	サンショウモ	浮漂	△
10 ハスイレン	抽水	○	27 アサザ	リンドウ	浮葉	△
11 ヒシ	ヒシ	浮葉	○	28 チョウジタデ	アカバナ	抽水	△
12 オニビシ	ヒシ	浮葉	○	29 ヤナギタデ	タデ	抽水	△
13 ウキクサ	ウキクサ	浮漂	○	30 イヌタデ	タデ	抽水	△
14 アオウキクサ	ウキクサ	浮漂	○	31 タカサブロウ	キク	抽水	△
15 アカウキクサ	サンショウモ	浮漂	○	32 アメリカセンダングサ	キク	抽水	△
16 ヌカキビ	イネ	抽水	△	33 ドクゼリ	セリ	抽水	△
17 アゼガヤ	イネ	抽水	△	34 ヒシモドキ	ゴマ	浮葉	△

※沈水雑草は含まない。　※※雑草害　◎雑草害が問題化している　○多くのクリークに生育しているが、問題にはなっていない。△まれに生育している程度。　※※※湿生雑草を含む。



新北神社の楠

参考文献　日本鳥類生態学資料　川口孫四郎著　昭和十二年
佐賀の鳥　倉成栄吉著　昭和三十年
有明海　高木正人著　昭和五十四年
有明海（自然・生物・観察ガイド）　菅野徹著　昭和五十六年
郷土の自然と風土　手塚静雄編　昭和四十二年

表9　諸富町の名木古木

樹種	推定樹齢	樹木の大きさ 高さ	幹まわり	根張り	所在地	所有者
		m	m	m		
クスノキ	900	15.5	5.65	21.5	諸富町大堂	大堂神社
〃	250	15.0	2.50	18.0	〃	〃
〃	300	18.6	3.75	18.0	諸富町三重	新北神社
〃	1600	23.0	4.90	24.0	〃	〃
ゴヨウマツ	300	14.5	1.8	8.0	〃	〃
ビャクシン	1600	20.0	4.1	6.0	〃	〃

このほか名木・古木の表に入っていないが諸富町太田の慈広寺には、見事なソテツの木がある。

(八) 気　象

1 気候の概要

諸富町は地理的に地形的に佐賀地方気象台と気象条件をほぼ同じにしているので、佐賀地方気象台の資料を中心に四季の変化を眺めてみたい。

本町は有明海沿岸に近く、気温はきわめて温暖で、町内には亜熱帯植物である樟（楠）の巨木が多い。人間が暮らしやすい快適な気候は、気温一五度～二〇度、湿度六〇～六五％といわれる。昭和四十年より五十五年までの佐賀市の年平均気温（図11）をみてもわかるように、一六度内外である。この温度は東京より二度、札幌より八度高く、那覇より六度低い平均温度に当たる。県内では古湯より一度高く、唐津より一度低い。

年降水量は全国平均一、六〇〇ミリより二〇〇ミリほど多い。県内では古湯より五〇〇ミリも少ない。湿度は七四％で、快適といわれ

図11　全年雨量および年平均気温分布図

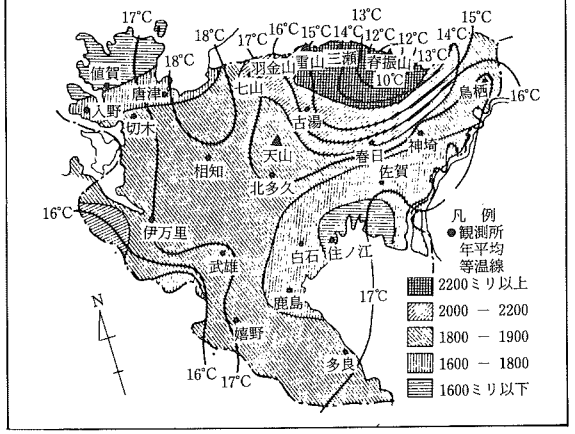
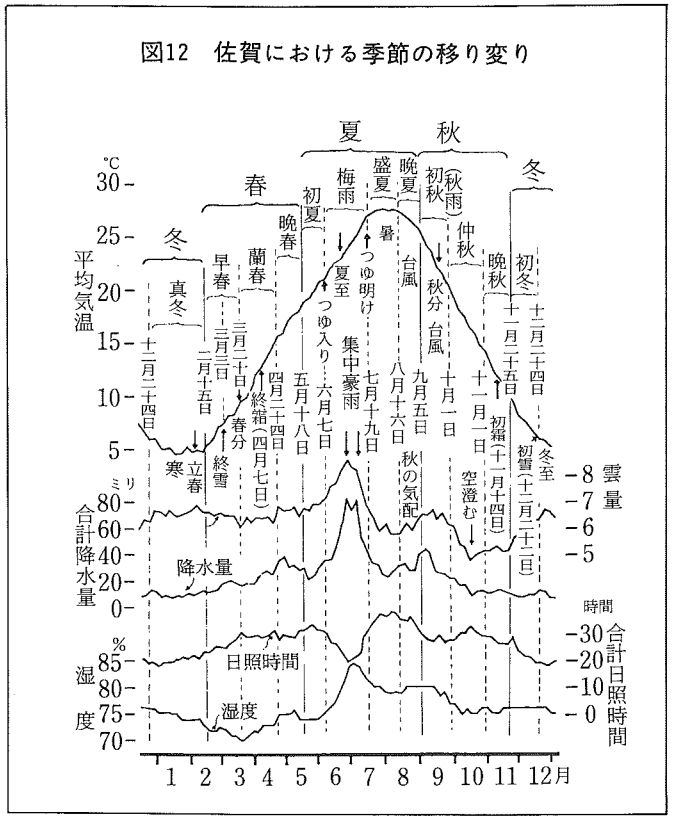


図12　佐賀における季節の移り変り



る湿度に比べると高いが、日本の平均湿度からみると、必ずしも多湿とはいえない。しかし、佐賀平野部は海陸風の影響が少ないため、盛夏期、とくに夜間はむし暑いのが欠点で、古くから寝莫産を用いる生活の知恵が生まれている。

佐賀におけるいろいろな気象要素を五日ごとに八〇年間平均した図12（山崎道夫編『佐賀の天気』所載）によると季節の変化がよくわかる。

2 四季の変化

一月は平均気温五度程度で、年間の最寒期、大陸の高気圧が発達し、北西の季節風が吹き続き、脊振、天山には白雪をみるようになる。夜は渡りカモの鳴き声が闇の静けさを破る。しかし、真冬でもいくらか三寒四温の動きがあって

表10　佐賀市周辺の気象と生活表

（昭28～昭35の８年間の平均値）（昭和38・〝佐賀県の天気と天気のことわざ〟による）

月	1	2	3	4	5	6
日	2720 9	21 4	21 5	7	6	22 1311
暦と気象	積雪の初日 大寒 平均最低気温の最低	立春 積雪の終日	雪の終日 春分結氷の終日	霜の終日	立夏	入梅 佐賀のツユ入り 夏至
日		28 1	2619 3	23 6 2	16 12	
動植物季節		ウメ開花 ウグイス鳴き始める	モンシロチョウ出る ツバメ来る ソメイヨシノ開花	イチョウ発芽 ソメイヨシノ満開 ヤマツツジ開花	ミカン開花 ヘイケホタル出る	
日			29 1814 13	5	21	8
生活季節			コタツ使わない 外とう脱ぐ ストーブたかなくなる 冬服脱ぐ	火ばち使わなくなる	カヤのつり始め	夏服着る
月	7	8	9	10	11	12
日	23 15	14 8	23 1	24	16 8	2322 10 1
暦と気象	ツユあけ 大暑	立秋 平均最高気温の最高	二百十日 秋分	霜降	立冬 初霜	初氷 天山山頂冠雪 冬至 初雪
日	21	4	30	14	30 15	29
動植物季節	アブラセミ鳴く	ツクツクボウシ鳴く	コスモス開花	ツバメ去る	イチョウ黄葉 イチョウ落葉	スイセン開花
日	5		27 8	3	25 22 9	8 7 5
生活季節	水泳始まる		水泳終わり カヤのつり終わり	夏服脱ぐ	火バチ使い始める 冬服着始める 手袋使い出す	コタツ入れる 外とうを着る ストーブたき始める

凌ぎやすい。雨量も日照時間も年間で最も少ないが、湿度はかなり高い。

二月の中旬から気温が上昇、梅が花を咲かせる。下旬にはだいぶ陽気になるが、時には大陸から黄砂が飛来して、空が曇ることがある。

三月になると大陸高気圧もしだいに衰えて、天気の変化もはげしく、気温も上昇、春雨のため、樹々は新緑の芽をのぞかせる。俗に「木の芽ながせ」などと呼んでいる。「暑さ寒さも彼岸まで」の諺のように、三月下旬になると、人々の衣装も春めいて、桜も満開となる。

四月になると平均気温も一四度を超し、春雨に花曇りの季節となる。初旬にはツバメが飛来、吉野桜も満開、有明海は潮干狩の船でにぎわう。中旬には麦の穂が出る。

五月は新緑の季節で、青空に鯉のぼりが泳ぎ、平均気温も一七度を超す。日照時間も毎日六時間くらいとなり、下旬から六月初旬にかけて麦の収穫期となる。

六月は平均気温も二二度と上がり、湿度も八〇％以上となる。中旬ころから梅雨となり、雨量も一〇〇㍉を超える。農家では田植えの季節となり、戦前までは「猫の手も借りたい」といわれていたが、近年は機械化が進んでわけなく終わる。梅雨の末期には集中豪雨となって、大きな被害をだすことがある。

七月は上旬まで梅雨が続く、陽ざしも強くなり、最高気温は三〇度を突破し、湿度は八〇％を超え、好天の日には入道雲が出る。雷雨を伴う夕立がしばしばある。月末は酷暑となるが、子どもたちには楽しい夏休みの季節となる。

八月は小笠原付近の高気圧が固定し、連日晴天となり、日照時間も最大となる。炎暑いよいよ耐えがたく、子

どもの水遊びのシーズンでもある。またときには干天続きで灌漑水に悩む年があるかと思えば、台風襲来による豪雨による大水害を起こした年も少なくない。昭和十四年の干害、二十四年、二十八年、四十七年の水害などは主なものである。下旬には佐賀名物の菱が出はじめる。

九月は平均気温は二三度に下がるが、雨量は年間で、梅雨期の六月に次いで多い、農家の恐れる二百十日、二百二十日前後は稲穂の出はじめたころで、台風と暴風雨に見舞われることが多く、しばしば大きな災害を被ったことがある。下旬は気温も下がり、彼岸を迎えるころになると曼珠沙華（まんじゅしゃげ）の花が咲き、朝夕はめっきり涼しくなる。

十月は平均気温一七度、雨量は九月の半分に減り、移動性高気圧が日本をおおい、一年中で一番天気がよい。コスモスの花が咲き、蜜柑や柿、栗など秋の果物が色づき、秋祭の太鼓や体育祭などが各地で実施される。

十一月は平均気温一二度と下がり、前月と同じく晴天が多いが北寄りの風が強くなり、田圃では稲刈りがはずみ、稲小積みがみられるようになる。今日ではコンバインの収穫で小積みは少なくなった。下旬は樹木の紅葉がはじまる。

十二月は平均気温七度に下がり、北西の季節風が強い日はかなりの寒をおぼえ、中旬には初雪をみることが多い。雨量は一年中で最も少なく、月間六〇㍉内外である。年中で最も日の短い冬至は十二月二十二日ころで、冬至粥（かゆ）や冬至南瓜（かぼちゃ）を食べたり、柚子（ゆず）湯に入って無病息災を願う習慣がある。下旬にはしばしば酷寒が来ることがある。寒波の襲来は周期的で三寒四温に似ている。有明海周辺の堀割りには鴨の群がみられる。

(九) 天災地変

筑後川は別名一夜川の名があるように、洪水によって、しばしば大災害を起こした。米倉二郎氏の『筑後川下流平野の開発』（史林一七の一～二）によると「天正六年（一五七八）より、大正七年に至る三四六年間に現われたる筑後川の洪水総数は一一八回にして、三年に一回の割合を示し、やや顕著にして被害の記事あるもの五四回にして、六年に一回となり、特に激烈にして多大の損害ありしものは一八年に一回現われている」と記されている。

本町は東に筑後川と大堂川、北に佐賀江湖、南に筑後川の分流である早津江川、中央に新川が流れており、水害が起こりやすい土地柄である。

水害の原因は山地に降った大量の雨に川の堤防が破壊され氾濫することが多かった。また一つには有明海の潮汐によって、水位が高くなり、筑後川や新川の水を押し上げ、山地から流れてくる水をせきとめる形となるため、川水は堤防を破壊したり、あふれ出して洪水となる。一方、筑後川に面する河岸には堤防が築かれているが、海水の浸入を恐れて、排水の井樋が少ない。そのため氾濫した洪水は、堤防の内側に溜まって排水不能となり、稲作などに大きな被害を及ぼすことになる。

洪水は六、七月における梅雨前線の停滞による連続豪雨と、八、九月における台風に伴う集中豪雨によることが多く、農村である当地域は水稲の被害が甚大である。

戦後だけでも昭和二十年九月の枕崎台風、二十二年九月のカスリーン台風、二十三年九月のアイオン台風、二十四年八月のジュディス台風、二十八年六月の大豪雨、二十九年の洞爺丸台風、三十一年の台風九号など応接にいとまのないように襲来して、各地に大災害を与えた。

この中で本町に大きな被害を与えたジュディス台風と二十八水、三十一年の台風九号災害を眺めてみる。

(1) 昭和二十四年八月十六日　ジュディス台風

八月七日、南方パラオ諸島付近で発生してゆっくり北上、十三日石垣島洋上に進む。その後薩摩半島に上陸。急に速度を落して、九州南部を斜断、長崎県西洋から対馬西方で三日間も停滞して、向きを東にかえて雨台風となり、山陰へ向かった。

佐賀市では総降水量四八九・七ミリ。古湯で七六六ミリ。山間部では七〇〇ミリを超える豪雨となった。佐賀の最大風速一四・七メートル、一時間最大雨量四〇・六ミリ。佐賀郡北部山地が被害の中心となった。死者八九、行方不明六、重軽傷者二八一、罹災者三万一八一六、住家全壊二三四、流失一二八、半壊六一〇、床上浸水二万四九二、道路決壊一五五二、橋梁流失四六九、堤塘決壊七二二、冠水田二万五二〇〇町、同畑一六〇四町。

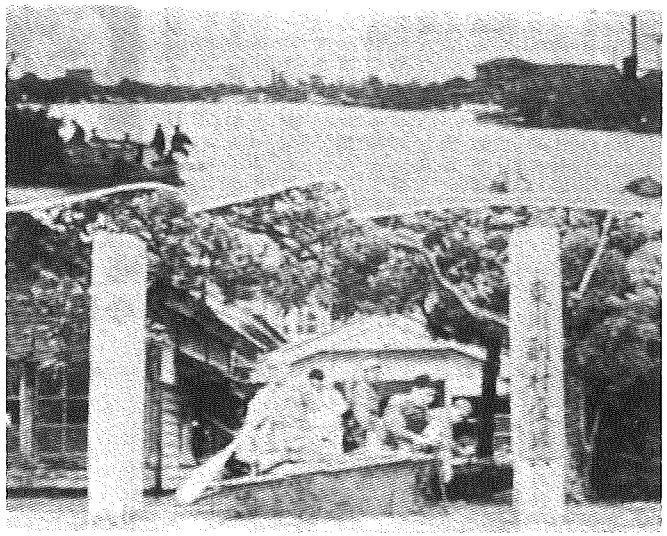
本町の場合は佐賀江湖の堤防が十七日、数か所にわたって決潰、全町一メートルを超える浸水となった。また新川を逆流する潮汐は、野町付近で上流からの流れ下る濁流とぶつかり、河道からあふれた。地盤のやや高い国鉄の諸富駅近くを中心に円運動的浸水が行われた。この様な関係から水深のわりに滞水日数が長く、減水には一週間あまりかかった。家屋への床上浸水や床下浸水は多かったが、人命に関する被害がなかったのが何よりの幸いだった。

水害の原因をなした佐賀江湖の堤防決潰を目のあたりにみた北川副村公民館主事、川原萬里氏は当時の感想を

次のように残している。

感　想

ジュディス台風に因る佐賀縣下の被害は實に莫大なものであるが、わが北川副村に於てもその災害から遁れることはできず約二千万円に上る被害を数え、古老の語る六十年振りという驚異的記録を示した原因については単に自然の脅威とのみ看過することの能きないものがある。結論からいえばその最大原因と責任は戦争にある。直接の原因と責任は村民の生活に直結した菜園開拓を堤防に許可した縣知事にある。堤防決潰……今更死児の年令を数うる愚を敢てするものではないが戦時中一坪の空地もないように食糧を増産せよと督励鞭撻した當時の政策が終戦後の今日までそのまゝ惰力となって来た。しかも萬一を慮りながらも食糧難を理由に人々は堤防に鍬を入れることをやめず、一方縣當局に於ては小さな財政的見地から些かな雑収入を目當てに将来を考慮することなく小笹伐採名目で堤防の菜園化を黙許した為に、佐賀江南岸、枝吉―江上町―犬尾に至る二キロの堤防は地盤軟弱となり遂に六ヶ所決潰という重大事を惹起した事實は否めない。



東川副村役場前の浸水(28水)を伝える「東川副広報」

しかしながらこれは何所の責任で誰の罪だなどゝいうことを事新らしく説立てるよりもこれを契機として速かに百年の大計を樹てるべきである。姑息的な應急措置による一時凌ぎの復旧工事では又々前轍をふむことは火を見るよりも明らかなことで経済的に見ても被害を繰返すことは恒久的施設に要するより多額の金と資材とを必要とすることも亦自明の理であり、この際一大決断以て須らく百年の大計樹立を強調してやまぬものである。

(2) 昭和二十八年六月二十五日～二十八日〔二八水〕大豪雨

近年の気象史上、稀にみる大豪雨で、筑後川沿いの地域は大きな被害を受けた。

六月二十五日、佐賀市の雨量一八〇ミリ、二十六日朝から昼ごろまで激しい雨で、佐賀市で一時間に七二ミリを記録、この日山間部では一八〇ミリ前後の雨が降った。二十七日、朝から強雨、佐賀一〇〇ミリ、山間で一五〇ミリ程度の雨。二十八日、佐賀では小雨、しかし、山間部では一五〇ミリ程度の雨が降った。この四日間の雨量は佐賀平坦部で六〇〇ミリ、山間部では九〇〇ミリ近くで、一年間の降水量の三分の一をわずか四日間で降らした。

各河川の堤防は至るところで決壊、氾濫し、筑後川流域の平野は一面の泥海となり、本町はじまって以来の大災であった。罹災世帯数一五一二戸、罹災人員八、四八四名、救助総額二、一〇〇万円におよんだ。

この豪雨被害は佐賀県下では二四九億円にのぼり、昭和二十八年の県民所得四一六億円の六割に相当する額であった。

本町で特に被害の大きかったのは、搦地区で、漁港は壊滅的な被害を出した。また家屋は軒先きまで浸水、満潮時の海潮が逆流して水田に流れ込み、田植えのすんだばかりの水田に浸水し、稲作は全滅した。水害を受けなかった大詫間などから救援苗を得て、七月末田植えをやりなおした。

(3) 昭和三十一年八月十六日～十八日　台風9号災害

八月十二日、沖縄南方五六〇キロメートルの海上で発生した台風九号は、十五日夜沖縄本島の西の海上を経て、十六日午後九州南西海上に近づき、夜半から十七日の未明にかけて、五島から玄界灘に出た。十六日から佐賀地方は風雨が強くなり、暴風雨となった。ことに台風の東半円に入ったため、南東～南西（順転）の風が強く吹き続いた。

表11　昭和28年豪雨災害状況

（諸富町内）

人の被害		重傷者	14人
		軽傷者	71
住家の被害		全壊	1世帯
		半壊	8
		床上浸水	1,509
		床下浸水	8,473
非住家の被害		全壊	17棟
		半壊	22
		流失	1
		床上浸水	524
		床下浸水	26
農作物被害	田	冠水	389町
		流失	10
	畑	冠水	20町
		流失	12
道路の被害	国県道	冠水	7,500m
		決壊（3か所）	88
		埋没（1か所）	300
	町道	冠水	52,356m
		流失（6か所）	300
		決壊（12か所）	370
		埋没（1か所）	300
橋		落下（10か所）	39m
堤防		決壊（3か所）	230m
		崩壊	4,700

新地搦の堤防復旧作業　（31年台風9号災害）

有明海沿岸では不幸にも満潮時と強風時が重なり、約一四㍍の気象潮が加わったため、久保田、大授、西川副、南川副の各干拓堤防は各所で決壊、本町の筑後川沿岸の地区では殆ど床上浸水、新地搦の堤防を切って排水するほどの被害を出した。本町関係の罹災世帯数一〇二戸、罹災人員五四六人、県では仮設住宅二戸、応急家屋補修九戸を建て救済に当たった。

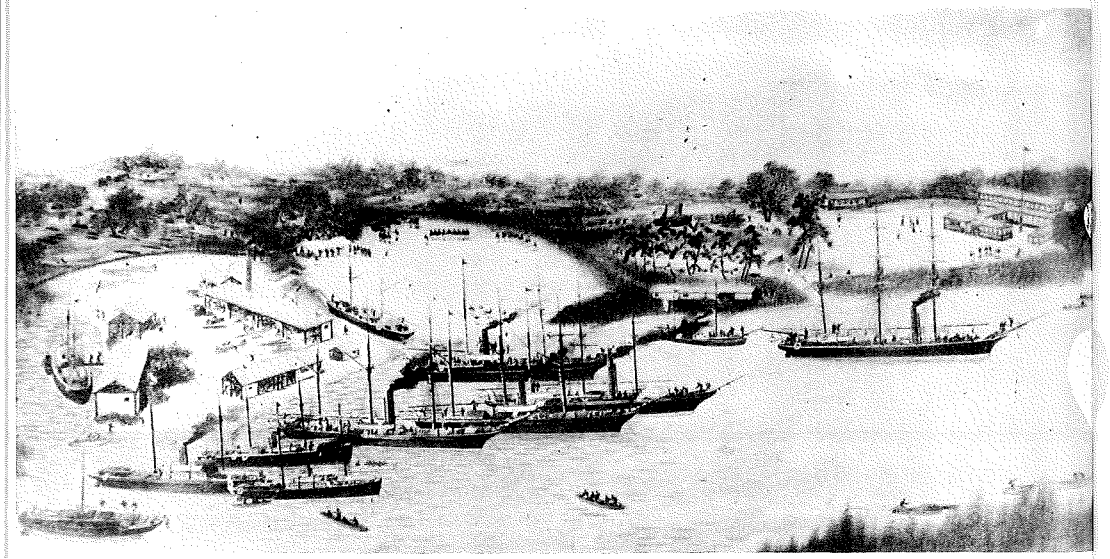
災害には気象災害などの天災と地震のような地異がある。佐賀県は地震が少なくなく、本町でも記録に残るような被害は残っていないが、昭和二十一年十二月二十二日に起こった南海道大地震は、佐賀でも震度三を示し、各地で瓦が落ちたり、煙突が倒れたりしている。当時の『佐賀新聞』に「佐賀郡東川副村諸富署管内、倉庫倒壊一戸、塀倒壊五ヵ所」とみえる。

災害にともなって疫病がでたり、飢饉になったりする人災も多い。火災などは人災に入るが、諸富町では今日までそれほどの大火は発生していない。明治以後の主な火災は別表のようなものである。

年月日	火災の場所と内容
明治二十七年一月二十一日	諸富津東小路小森清八家楼上より出火、小島屋、迎屋ら一四戸全焼
同二十七年三月二十三日	新北村浮盃の空家より出火一九戸焼失
大正五年十一月十五日	諸富字中小路、米穀商徳永方から出火五戸全焼
同十五年六月二十六日	東川副村大黨浅場、田中方出火、住家三、倉庫二焼失
昭和十三年二月九日	新北小学校第一校舎より出火、第二、第三校舎を全焼
同十五年一月二十六日	新北村寺井津に出火、六棟全焼
同二十年八月六日	アメリカ空軍機の爆撃で、東川副村九七戸、新北村一〇五戸全焼
同四十九年十二月二十三日	諸富津津田良助宅外二棟全焼
同五十一年四月二十七日	徳富九州電力佐賀営業所所有変電所全焼
同五十四年三月二十五日	大堂字陣内成富時雄・松尾徳一宅ほか五棟焼失
同五十五年十二月十四日	為重の中島義男宅全焼

（「佐賀県災異誌」による）

歴史



三重津の佐賀藩海軍伝習所絵図